# タ　　イ

平成4年1月28日～２月6日

日本青年団協議会

# 1. 調査チーム派遣概要

## 1－1調査チームの構成

| | 氏　　名 | 生年月日 | 性別 | （上段）現住所（下段）所属先 |
|---|---|---|---|---|
| チーム・リーダー | 中西博之 | 昭和35年 2月 8日 | 男 | 〒899－86鹿児島県曽於群末吉町南之郷4503－2<br>☎0986－76－4101<br>日本青年団協議会　常任理事<br>〒160東京都新宿区霞岳15日本青年館内<br>☎03－3475－2490 |
| メンバー | 市村聖治 | 昭和34年12月23日 | 男 | 〒116東京都荒川区東尾2－12－17－302<br>☎03－3819－3495<br>日本青年団協議会　教宣部長<br>〒160東京都新宿区霞岳15日本青年館内<br>☎03－3475－2490 |
| メンバー | 宮本純子 | 昭和26年 4月21日 | 女 | 〒852長崎県長崎市石神町30－4<br>☎0958－45－3747<br>長崎県企画部国際交流課<br>〒850長崎県長崎市江戸町2－13<br>☎0958－28－0302 |
| メンバー | 久保田満宏 | 昭和35年 3月15日 | 男 | 〒937富山県魚津市北鬼江1719<br>☎0765－22－1070<br>富山県青年団協議会　事務局長<br>〒930富山県富山市五福3960<br>☎0764－31－2093 |
| メンバー | 松原幹昌 | 昭和38年10月24日 | 男 | 〒930-02富山県中新川群立山町横沢48<br>☎0764－62－3458<br>富山県青年団協議会　常任理事<br>〒930富山県富山市五福3960<br>☎0764－31－2093 |

## 1－2．調査日程

〈1月28日（火）〉

12：50　成田発　UA821便

17：45　バンコク国際空港着

空港でNYBスタッフが出迎えいったんホテルに入り，MR.NARONG KORNSOMBUT（1990年友情計画参加者）と会食

〈1月29日（水）〉

10：00　JICAタイ事務所表敬訪問。

阿部所長からタイの近況，およびタイ事務所の役割についてレクチャーを受けるとともに，芦野氏より日程を説明していただき，通訳ヤン・マリー女史を紹介される。

12：00　マリー女史とともに日本広報センターを訪問。広報センターで働く元長崎大学留学生たちと面会。

14：00　タイ総理府青少年局（NYB）表敬訪問。

VIRATH政策企画部長から歓迎の挨拶の後，NYBの活動をスライドで説明を受け，その後意見を交換する。

16：00　バンコク市街見学

〈1月30日（木）〉

7：30　ホテル発CHONBURIへ。

10：00　CHONBURIの聾学校（SOTSUKSA CHONBURI SCHOOL 訪問

先生たちと意見交換，MS.UNAWAN MANJAI（1991年友情計画参加者）の活躍ぶりを視察。

18：00　バンコク市内でタイの21世紀のための友情計画同窓会（ALUMNI ASSOCIATION OF THAILAND）のメンバーと夕食会

〈1月31日（金）〉

9：00　BANGKOK発　TG114

11：05　CHIANG MAI着

チェンマイ市役所のメンバー（MR.BOONSONG WONGKUANKAEW/ MR.PAITOON POTHISART＝1991年友情計画計画参加者）の出迎えを受け，チェンマイ市

内の小学校で歓迎昼食会

15：00　ワット・プラタード・ドイ・ステープ，山岳民族モン族のドイ・プイ村，チェンマイ近郊のボーイスカウトキャンプを訪問。

夕食は OLD CHIANG MAI CULUTURAL CENTER で市役所のメンバーと会食。

〈2月1日（土）〉

10：00　MR.BOONSONG/MR.PAITOON の案内で象のショー，メサ滝，ランセンター，ROONG AROON HOT SPRING，傘工場などを見学

18：00　チェンマイ市役所主催の歓迎パーティー，その後職員たちの案内でナイトバザール見学・ホテルで交流会

〈2月2日（日）〉

10：00　ワット・プラシン見学

14：00　チェンマイ発　TG105

15：00　バンコク着

〈2月3日（月）〉

10：00　バンコク市内の精神薄弱児施設（THE LIGHTHOUSE TRAINING CENTER FOR THE MENTALLY RETARDED）訪問

MR.SANGUANSAK JUNPUN（1991年友情計画参加者）の活躍ぶりを見学

14：00　バンコク市内の子どもセンター（FOUNDATION FOR SLUM CHILD CARE）訪問。スラムの実態を見学するとともに，MS.YAIMAI THOUGSAGANSAK（1991年友情計画参加者）の活躍ぶりを見学。

〈2月4日（火）〉

（3グループに分かれて見学）

（中西・市村）

ナコンナヨク県ムーリー村のソンマイ氏（1990年友情計画参加者）宅を訪問。現地の農業の実態・農家を見学。

（久保田・松原）

1991年友情計画参加者の職場訪問。

（宮本）

現地青年海外協力隊員・日本語教師佐藤史子氏をタマサート大学に訪ねる。

（夕刻合流）

18：00　SIAM BEVERLY HOTEL でさらならパーティー

〈2月5日（水）〉

バンコク市内観光

22：30　バンコク発　UA828

〈2月6日（木）〉

6：30　成田着

1－3　主要面談者（意見交換内容の項に掲載）

調査の要約

今回のチームは21世紀のための友情計画を実施している日本青年団協議会から役局員2名，日本青年団協議会に加盟している富山県青年団協議会から2名，それに長崎県企画部国際交流課から担当職員が1名参加した。

日本青年団協議会ではこれまでに21世紀のための友情計画のプログラムとして，1990年にタイの地域振興テーマBグループ，91年にタイの青年指導者グループと社会福祉テーマBグループを受入れている。このうち富山県青年団協議会は91年の社会福祉テーマBグループを地方プログラムで受け入れており，今回はこれらの青年たちを現地に訪ね，彼らの活動を視察することに重点をおいた。

残念ながらホームステイプログラムは実現できなかったものの，とりわけ91年の社会福祉テーマBグループに参加したメンバーが，それぞれの福祉の現場で献身的な努力を続けていることに，団員一同感銘を受けた。

## 2.　現地活動報告

2－1．表敬・訪問先における意見交換内容

（1）JICA タイ事務所

日　　時：1月29日（水）午前

面談者：阿部信司　所長

芦野　誠　職員（今回の受入担当）

比嘉京治　職員（JOCV 担当）

● 所長との懇談

我が国のタイに対するODA総額は年間約900億円であり，1975年以降タイにとって最大の援助額（２国間のODAの７割）を占めている。タイからの研修員受入は年間約650名協力隊員派遣は平成元年度16名，専門家派遣は年間約700名の実績がある。これらの業務を，職員34名（日本人スタッフ15名，タイ人スタッフ19名）で行っている。

タイでは現在，第７次社会経済開発計画（91年から５ヶ年計画）が進行中で，前年の90年度の経済成長率は12％と３年連続で２桁代の成長を続けており，それには日本企業の進出が大きく影響を与えている。しかし急激な経済成長により，いろいろな面で歪みを生じている。かつては世界一の米の輸出を誇る農業国であったが，工業化の進展により，国内における生産額では60年代の40％から89年には15.1％に落ち込み，製造業の26％を下回っている。農業人口も60年代の82％から現在では60％に減少し，農村部の過疎化，都市への人口集中が進んでいる。それはスラムの増加，都市部の交通の交通問題，国境周辺の過疎化による国防問題，環境問題，農村と都市との経済格差といった具合に様々な問題を引き起こしている。

● 芦野担当職員との打ち合わせ

タイ滞在中の最終日程を確認したが，友情計画で1991年に日本を訪問した青年の３ヶ所の職場視察および私の希望であった青年海外協力隊員の活動状況視察は可能であったが，最大の目的としていたチェンマイでのホームステイは受入家庭がいないとのことで出来なく残念であった。

（２）タイ総理府青少年局（NYB）

日　　時：１月29日（水）午後

面談者：Mr. Virath Damrongphol　政策企画課長

その他青年招聘事業関係者　　５名

● 政策企画課長との懇談

タイにおける「21世紀のための友情計画」青年招聘事業の担当窓口で，毎年150名を派遣している。当局の役員の80％が日本への出張の経験があり，日本の印象は国の経済発展もさることながら国民性についても大変好感をもっている。また青年招聘事業に対する期待も評価も大変高いとのことであった。

NYBは1965年に設立され，現在７部（秘書，企画，青年計画，協力，広報，教育，外交）から成る。０～25才までの1700万人を対象とし，教育を含め青少年育成のため諸活動の推進を行っている。その活動状況についてスライドによる紹介があった。

（3） 招聘青年の職場視察

1991年日本青年団協議会が受け入れた社会福祉をテーマとする青年グループの，帰国後の活動状況を視察するため福祉施設３ヶ所を訪問した。

● 国立 SOTSUKSA・チョンブリろう学校

日　　時：１月30日（木）

随　　行：Mr. Thanan Pitakwong（NYB 職員）

面談者：Ms Pornprapa Thaiutid　教頭

Ms Unawan Manjai（招聘青年）

（教頭による学校の概要説明）

聴覚障害者の学校は，全国で当校を含め国立の９校（中部４，北部２，東北部１，南部２）のみで，日本の109校に比べ極端に少なく，数字の上からも福祉制度の遅れが理解できる。幼稚園から中学校までの教育を行い，生徒数323人のうち260人は寮生である。国立なので食費を含め学費は無料。教師は男性６，女性37の計43名。寮で生徒と生活を伴にしているウナワン先生は，朝５時起床から夜遅くまで教科の指導に加え，学生の生活指導，寮生の世話，その他市民の相談業務とデートをする暇もないほどの忙しさである。教育内容は，特に話すことに力をいれており，卒業後自活できる程度の技術を習得させることである。

文部省の幹部ですら聴覚障害者教育の必要性を認識している人が少なく，学校の存在すら余り知られていないという厳しい状況を理解することができ，また学校が一般市民への聴力検査を実施したり，補聴器の提供や修理，使用方法の指導など，社会一般の理解を求める活動にも努力しておられるのを知り，頭が下がる思いだった。

（校内の視察）

広い敷地の中に校舎と寮が併設され，花壇や畑もあり裏は道路を隔ててビーチが続く良い環境に恵まれているのが印象的だった。ただ聴覚検査用の機械が一台しかなく，しかも旧式であるので不便を感じている説明に，設備の不十分さを改めて感じた。

● ライトハウス・トレーニング・センター（心身障害児訓練センター）

日　　時：２月３日（月）午前

随　　行：Ms Sureeporn Sereerat（NYB 職員）

面談者：Mr. プラシット校長

Mr. Sanguansak Junpu（招聘青年）

（校長による施設の概要説明）

心身障害者のための施設は，全国で国立が３ヶ所，民間が８ヶ所とこれまた20～30万人いると言われる障害児には，話にならない数である。３～18才を対象とし，生徒数は60人，職員は全部で29名。当施設の教育目標は，話す・書く・読む・体を動かすを中心に，健康児のレベルまで達成させ普通の学校または職業訓練校に入れるまでにする，あるいは自力で生活できる程度まで訓練することである。またこの施設は，障害児教育に携わる教師の育成のための訓練も行っている。

しかし民間施設のため，日本等の遠い国からの援助は全く無く，個人や民間企業・団体からの寄附や援助または施設の収入（保育料や催物による収益等）により，人件費，運営費教員の訓練資金などすべてを賄っている。保育料も月3,000バーツ（約15,000円）だが，払える余裕の無い人は無料で預かるそうだ。また，給料が安いためこのような施設に働く人が少なく，予算に加えスタッフ不足も深刻な問題である。

このような民間の福祉施設を訪問して改めて，この国の福祉制度の未熟さに驚かされ悲観する反面，サグアンサック君のような若くて有能な青年達が厳しい状況にも拘らず，献身的にたくましく働く姿を見て，敬服の念を抱くと共に希望の光を見る思いであった。彼らには頑張って欲しいと心から願った。

（施設内の視察）

敷地は広くないが，２階建の校舎は比較的新しく明るい。ちょうど中国の旧正月で休みの生徒が多く，人数は少なかったがのびのびと活動していた。保育料が高いせいか，外国からの駐在員の子供も多かった。おもちゃや学習教材の数が少ないのに驚いた。日本の子供達の贅沢なおもちゃを思い出し心が痛んだ。

● スラム児童福祉施設

日　　時：2月3日（月）午後

随　　行： Ms Surceporn Sereerat（NYB 職員）

面談者： Ms　スターティブ事務局長兼経理部長

Ms Yaimai Thongsanguansak（招聘青年）

（事務局長による施設の概要説明）

現国王の姉がスポンサーであるスラム児童保育財団により運営されており，国の援助が全く無い民間施設である。80％が国内，20％が外国の民間からの寄附による。東北部農村の貧民がバンコクに流れてきて定住し，バンコクとその周辺に200ヶ所以上のスラムを形成している。ここのスラムは主に港湾作業に従事する人々が住み，一家族5～6人で一か月の収入は約13,000円くらいだが，それでも農村の生活よりはまだ良いと言うことだ。0～3才までの幼児100人を預かり，うち30人は家庭の事情で月～金は宿泊させる。保母もスラム出身が多い。保育料は，母親への保育の必要性を認識されるため一日50円程度とるが，それさえ払えないものはもちろん無料である。

施設の活動内容は，子供の保育・教育，母親への育児指導，母と子の生活向上，母と子の間のトラブルの解決，その他母親への保健衛生・栄養に関する訪問指導，ごみ等の衛生処理

指導，同財団経営の他の５ヶ所の施設と指導者の交換などである。

スラムに対する国の対応策については，住宅を含む商業地区の増開発計画，スラム住民収容のアパートの建設計画，住民登録無しで義務教育を受けられる制度（今年から実施）など計画はあるらしい。またスラムを造らないために地方に仕事の機会を増やすことを目的に，30ヶ所に製造会社を誘致し職業を与える計画もあるという事だ。

（施設内およびスラム地区の視察）

ここの保育施設は狭く，お世辞にも奇麗とは言えないが，保母達は一生懸命に子供達の世話をしていて明るい。同財団ではミルクを安く仕入れ，母親達に安く売る活動もしており，それを買いに来る母親達が多く見られた。

スラム地区の中は，外から見る以上に暗く汚れている。家が密集しているので，殆ど陽が当たらず家の中は真っ暗で，洗濯物を干すスペースなど全く無い。電気は来ているが水は井戸水を使用。昼間からゴロゴロ寝ている人が多い。訪ねた一軒の老婆の家は，子供達が麻薬に侵され息子は刑務所，放心状態でとなりに座る娘も明日病院に収容されるとのことだ。またごみ捨て場は処理されないまま悪臭を放ち，汚い池まであり，あまりの不衛生さに驚いた。

（4）　招聘青年との交流

同窓会（Alumni Association）との懇談

日　　時：1月30日（木）午後6時

場　　所：コカ・レストラン

出席者：Mr. Surapon Pituckimskul 会長　他7名

意見交換会かオリエンテーションのような形で交流できるものと期待していたが，単なる歓迎夕食会（招待されたのは大変嬉しいが）で終わったのは非常に残念だった。タイの同窓会は，ほかのアセアン諸国に比べ組織がまだ弱く，アフターケア調査の受入などもよく整っていないようだ。英語もお互いうまく通じないため，招聘事業に関する率直な意見を聞ける良い機会だと期待していたが，残念であった。しかしながら個人的には，とても明るく親しみやすく好感の持てる人達で，招聘青年事業による日本での経験は誰もが良い評価をしている。何といってもホストファミリーとの関係は，一生忘れられない思い出のようだ。今後の同窓会組織の発展を期待したい。

（5）　青年海外協力隊員の活動状況視察

日　　時：2月4日（火）午前

場　　所：シーナカリウォロート国立大学パトンワン校

面談者：佐藤史子　隊員（神奈川県出身日本語教師）

鈴木潤子　隊員（東京都出身　　〃　　）

私（宮本）はJICAの青年海外協力隊事業を担当しているので，特別この視察をお願いしたところ，JICAタイ事務所のJOCV担当者のご手配で訪問することができた。

2人の隊員が日本語を教えるパトンワン校は人文学部のみで，大学附属高校と併設されており敷地が狭い。そのため2年後本校に移転する予定で，1・2年生は既に本校に在学しており，現在は3・4年生のみで少なくのんびりとした雰囲気だった。

英語，仏語，独語が必須科目で，日本語と中国語は選択科目となっており，日本語は60名が受講する。3クラスが週2回の受講で週に計6回の授業がある。これを2人のJOCV隊員とタイ人の非常勤講師が受け持つので，比較的時間に余裕があり準備も十分に出来るとのことである。この日はあいにく佐藤隊員の授業が無い日で，授業風景を見ることが出来ず残念だった。

活動で困ったことはないかと聞いたところ，教材で必要なものを大学に請求するが，予算の都合で不可能な場合が多いことだそうだ。これは隊員共通の悩みのようだ。

### 2－2　帰国青年同窓会等の活動状況

タイの同窓会はいまだ政府に認められた正式なものになっていないため，組織力がまだまだ不十分で，アフターケア調査の受け入れを充分に行えるまでにはいたっていない。タイ側の派遣窓口である総理府青少年局と同窓会との意見交換も充分とはいえないようだった。

同窓会は，このようなアフターケア調査チームとの情報交換によって，今後の友情計画への参考となる有意義な意見や提言を出すことも可能であろうし，これから友情計画により日本に行こうとする青年たちへのアドバイスなど，活躍する場面は大いにあるはずである。また，そのような活動を通して組織も強化されると思うので，政府との連携を深め，今後の正式な組織化をふまえ，自主的・主体的な活動を繰り広げていくことを願ってやまない。

### 2－3　セミナー・交流会の実施状況

チェンマイで91年に参加した青年指導者グループのメンバー２人（MR.BOONSONG WONGKUANKAEW/MR.PAITOONM POTHISART）を囲んで交流会をもった。二人ともチェンマイ市役所の職員で，大の日本好き。献身的なほどの歓迎ぶりには頭が下がった。

### 2－4　ホームステイ実施状況

残念ながら今回，ホームステイはできなかった。

## 3.　訪問国における青少年団体の活動状況

NYB・同窓会以外の青少年団体との交流プログラムはなかった。タイ国内の青年の状況については各参加者の感想の項を参照。

## 4.　青年招聘事業における相手国側の評価

NYB で21世紀のための友情計画の参加者選考の過程をお聞きしたが，たいへんな人気で何十倍という競争率だという。選考基準等，なかなか難しいだろうが，農村部に基盤をもつ青年団組織としては，日常的には海外派遣の機会にめぐまれない地方で活動する農業青年たちをぜひ数多く参加させてほしい旨伝えた。

21世紀のための友情計画は確かに人気が高い。今後は青年の組織化が難しい国情の中で，

青年自身の要求にもとずいた企画・運営がすすめられればすばらしいと思う。

## 5. 調査チーム参加者の感想と提言

「献身的な若者たちに感動」　　中西博之　（日本青年団協議会）

暑い国タイ，空港に降り立った時ムッとする空気に思わず体中の毛穴からべたっとする汗を感じた。しかし通路で出迎えのNYBの女性２人の顔を見てその汗もふと，さわやかに感じた。ホテルに直行する車の中から大都市バンコクの夜景がきらびやかに光っている。その光るネオンはきれいだったが，日本企業のネオンは，あまり好ましく思えなかったのは何故だろう。また車の数が多くその時間はラッシュだったが，その後の日程の中で大ラッシュに巻きこまれ通常10分ぐらいで行く所を１時間かかった事もあった。交通手段が車しかないという事でしかたがないが，早急に都市計画等の必要性を強く感じた。また，その為か排ガスのせいで街の空気が悪く全体的にカスミがかかっている様にも思えた。その夜は，前に21世紀の友情計画で日本を訪れた事のあるナロンさんの案内で食事をした。美味でなおかつ安いのにおどろいた。

二日目に現地のJICA事務所で打ち合わせの後NYBにあいさつをして今回の目的のアフターケアへと向かう事になったが，当初の計画のホームステイが実行できなかった事が残念といえは残念であった。最初に訪れたのがチョンブリのろう学校で国営で９ケ所あろうという事だった。そこの先生のウナワン先生は日本に来て，責任性，技術，衛生，等々を感心させられたと言う。しかし彼女は学生を話ができる様になるまで指導していくのだそうだが，寮の仕事まで昼夜を問わず働き，それを12年間続けており今後もがんばっていくのだそうで，そんな彼女の姿に感動した。

また，その後に訪れた，精神薄弱施設（民間だそうだ）に勤めるサムリンサック君にしても献身的なのにおどろいたし，特にスラムの中の保護施設のヤイマイさんの姿は実に素晴らしかった。日本にもこういった人達は，いるのかもしれないが，福祉に対しては，専門的知識を持たない私だったからこう思ったのか，実に彼らは偉いと，そう思った。チエンマイに行った時に大歓迎を受けた。特に小学校での歓迎の昼食会での助役さんをはじめとする歓迎の言葉の数々や子供達の民族舞踊は非常にうれしく思った。またチエンマイでの日程中ずっと友情計画で滋賀に行ったブンソン君とパットーン君が随行してくれてチエンマイのいろんな所を案内してくれた，チエンマイはバンコクと違って，いろんなものが美しくバンコクより共感が持てた，また初日に訪れた少数民族のモン族の生活はそぼくですごく驚いたが，なんだか観せものにしているみたいで少し後味が悪い気がした。

タイの人々は，すごくエネルギッシュで街に並ぶ屋台の多さからも，また売り子の人々の動きからも，うかがえた。また接してくれた人々を見てもすごく親切であり（日本人だったからかなあ）好感がもてた。また宗教的なものなのか，弱者に対しての思いやりがあり，弱きを助けるという一面もあった。訪れた民間の施設もその経費のほとんどを一般の寄付によってまかなわれているという事からもそれがわかった。ただ言える事は，我々はその弱者がなぜ弱者なのかという事について関心を持ち，それをどういう風に変えていけばいいのかを考えたが，タイ人はその考え方について理解できていない様子であった。また友情計画のOB会招待の夕食会に招かれしばらく話をしたが，具体的な活動はされていない状態であった様に思う。この事はやはりタイでは若者の結社の自由が制限されており，組織するという事の意味や意義についての理解がうすくなっているのだと思った。しかし今後タイの発展を考える時に，彼らたちの活動を活発にしていく必要があるのではないかと思った。

タイで一番楽しかったのは最後に行った農村であった。特にどこからどこまでかわけのわからない果樹園は何かしらスケールが全然感覚的に違っていて（大きいという意味ではない）おもしろかった。また素朴なつくりの家と，そこに住んでいる人々はとっても純粋で，やはり我々の交流相手は都会に住んでいる人々でなく，ここの農村の人々であり，この純粋は人々に何らかのお手伝いができたならと思った。

最後に今回のプログラムでお世話になった皆様に心よりお礼申し上げる。ただ，どこに行っても今回のプログラムの趣旨が事前に伝わっておらずに何度となく趣旨の説明におわれて内容が深まらなかった。また青年指導者，福祉指導者を日青協は受け入れし，アフターケアを行なった訳だが，青年指導者は青年組織が十分機能していないため，意見がかみあわない所も多く，福祉指導者は，我々が専門外で，消化不良となった。またプログラムの企画，運営の役割分担が不明であり，ある意味では満足できない部分が残った。今後我々としては，特に農村青年との交流を主軸にし，組織の意義にそった形で交流をすすめることが必要だと思う。

「富山を訪ねた３人の素顔」　　久保田満宏　（富山県青年団協議会）

タイ青年受け入れたことがきっかけとなって，このアフターケアに参加させてもらったが，その成果は大きかったと感じている。

日本に来ていた時のタイ青年も自国では全く違った様子，予想すら出来なかった環境の中で力一杯仕事に取り組んでいる姿が一番印象に残った。

このアフターケアに参加しなければ，受け入れた青年達がどこで，どのような仕事をしているのか，どのような苦労と戦って仕事をしているのかがわからなかったであろうし，ただ受入れをしたという満足感だけに終わったと考える。

私達が職場訪問したのは，富山県団で昨年受入れをしたことのある社会福祉グループの，ウナワンさん，サグワンサック君，ヤイマイさんの職場であった，そこでの彼女たちの顔つきや目つき，仕事の内容は日本に来ていたときにはまったく見ることが出来ない想像をはるかに超えるものであった。

チョンブリ聾唖学校でことばと発声の仕方を様々な方法で必死に教えるウナワン先生の一生懸命な姿がとても印象的であった。先生の仕事のみならず，寮を管理する担当でもあり70人の児童生徒の母親がわりをも務めながら，生活風紀の指導に早朝5:00から熱心に取り組み，そして次は先生役に，夕方からは，また母親役にと，寮生活児童が寝床に入るまで休む暇がない。

ウナワン先生は幼児を受け持っている。

ヒヤリングの器具により話す練習を行う。予想以上の大きな声，ボデイアクションで授業を進めていく。一人ずつの能力状況を的確に捉え，個人個人に合わせた学習を行っている。下手な発音のこどももいれば，非常にうまく発音する子供もいる，そしてそれをうまくまとめているウナワン先生は30歳の若さにしてベテランを感じさせた。

毎日がこの様な調子であるからさぞかし疲れるであろうし，他の人より悩みも多いのではないだろうかと考えてしまった，ただ学校のすぐ裏がきれいな砂浜であり，子供達にとっても，気苦労の多い先生達にとっても息抜きの出来る良い環境に恵まれていることが幸いしているといえる。ウナワン先生をいつも見ている副校長先生がこういった「ウナワン先生はこの学校になくてはならない人です。彼女は努力家であり，まじめである。昨年日本に21世紀の友情計画に参加したのは，様々な勉強になったと報告を聞いており，今までほとんど休まずに働いてきた彼女の体休めにもなったのではないかと考えています。この国では，この様な学校も不足しているし，先生も不足している」との話しであり，ウナワン先生のような熱心な努力家が，非常に重要かつ必要とされていることを理解した。

タイ全国でもこの様な聾唖学校は９か所しか無く，学生だけでなく，地域の学校に入学したくても出来ない人にも器具を無償で渡してサービスし，地域と密着した活動を行っていることからも，地域に無くてはならない学校であり，この様な学校が地域における役割は大きいと感じた。

ウナワン先生たちの努力によつて，数多くの子供達が社会にでて職を持てるようになることを望むものである。

次に訪問したのは，日本に来ていた時は非常に明るい青年で，いつもニコニコ笑顔を絶やさずにいたサグワンサック君の職場であったが，いつも緊張して仕事に取り組んでいることが伺われた。

彼の職場は心身障害児のトレーニング施設である。

軽い心身障害児を普通の学校にいけるようにするため，また，普通の生活レベルになる様にするのが仕事であるそうだ，ただし，悩みは多く，敷地が足りないために，寮が無く遠方の人を受け入れることが出来ないということや，トレーニングの用具が不足しているということであっ。

彼が富山県に来たときに，何か要望があれば出来るかぎり調整して見ますから，というこちらの問いかけに対し「心身障害児の施設が日本に来てから一度も見ることが無いので，なんとかプログラムにいれて欲しい」という要望が出され，その要望がかなった時大変うれしそうな顔をし，また，この施設の視察が終わった時目に涙を浮かべ私に握手を求めてきたのを思い出した。その時は，よほど自分達と接している子供のことが心配であったのであろう，と私は思っていた。

彼の仕事を見て，その時の涙が何であるかがわかったような気がした。

手足も動かず，自分で御飯を食べられない子供にごはんを食べさせること，一緒にゲームをして遊ぶこと，教材を使って何かを作ること。相手が子供だけに細心の気配りが必要である。彼の努力によって数多くの子供達が普通の学校に，そして普通の生活レベルになる様に希望する。

次に訪問したのが，スラム児童援助財団，ヤイマイさんの職場である。

再会して，一番はじめに思ったのが，彼女が日本に滞在中あまり健康状態が優れず，何やら暗い雰囲気であったのが嘘のように明るく元気に迎え入れてくれたことが非常に嬉しく，また，ホッとした。

ヤイマイさんの仕事は，親が麻薬におかされていると病院に連れていく。教育を受けられない子供を学校につれていく。登録制度の確率。識字事業（3ケ月に1回）

デイケアーで教育指導を行っている。まず親の教育，衛生観念などが無い。

栄養状態が悪く，子供が出来ても母乳もでないという状況であるが，カユのしるや，脱脂粉乳で子供を育てている。王様の姉がスポンサーであり，安いミルクを仕入れて，安くスラムの人達に販売している。

政府からは援助は無いが，民間からの援助でまかなっている。民間からの援助のほうがスムーズで対応が早いのでその方が良いと思っている。

子供を教育していく段階では，食事を3回，デザートを2回，衣類を支給している。貧困の場合は無償で行うが，本当に貧困かは家まで調査しにいくという。子供は90人～100人を世話しているということであった。こんな話を聞いてから，実際にスラムを視察，実際にヤイマイさんが世話をしている，麻薬中毒患者の家を訪ねた。家には娘と母親がいた，ヤイマイさんの話しでは明日娘を警察に連れていくそうである，理由は麻薬患者の為であるという，一見普通の人であるのに何らや恐ろしい気がした。家の中は薄暗く8畳くらいで板張りであ

る。何もかもをそこでようを足すのであろう，色々な道具が周りに転がっていた。家の外のドラム缶には水があり，「この水はミルクを作ったり，飲料水として使われる」と聞いたが，よくのぞき込んで見るとボウフラがたくさん泳いでいる。一瞬目を疑ったが，ヤイマイさん達の仕事の大変さがよく理解できた様な気がする。

彼女達の努力がスラムの環境や教育を少しずつ変化させ，より住みよい生活が出来る様に望みたい。

この様に３人の戦場を訪ね，仕事の内容や，実際に働いている姿を見ることが出来て様々な問題に触れることが出来たことは，我々民間団体としての活動をも検討していくための，よいプログラムであったと感じた。またこのプログラムで得たことを仲間のみんなに伝えていきたいと思う。

今後も団体，個人としての交流を深めながら，相互理解に努めていきたい。

「この思いを多くの仲間に伝えたい！」　　松原　幹昌　（富山県青年団協議会）

今回，地方実施協力団体として私たちが受け入れをした「21世紀のための友情計画青年招へい事業」でのタイ青年たちとの出会いは，私たちに大きな影響を与えるものとなったといえる。

ひとつには，交流を通じての仲間づくり。もうひとつは，社会福祉グループのメンバーである彼らが，日本（富山）の社会福祉の現状を真剣に捉え，常に自分たちの国（地域）の現状を振り返りながら課題解決のために学ぼうとする姿勢である。

とくにこの姿勢を見て，これは地域に貢献し青年の生活の高揚を図ることを目的とした青年団組織にとって大切なことであるということを再確認した。

今回の受け入れを機に，この事業のアフターケアプログラムに参加した。
私たちが職場訪問した所は，富山に受け入れたときの仲間のうちの，ウナーワンさん，サグワンサックさん，ヤイマイさんの職場であった。

そこには日本での青年たちの真剣な姿勢を裏付けるにあたいする厳しい福祉の現状があった。

しかし，現状改善のために一生懸命仕事に取り組んでいる青年たちの姿を実際に見たとき，彼らの純粋な情熱，また，現状をしっかり自分たちの目で見て自分たちの地域や生活を振り返ることの大切さ，そして地域の人々や地域に対する私たちの愛情が大切であるということを感じた。

最初に訪問したのは，ウナーワンさんが働いているチョンブリ聾唖学校であった。

富山に滞在していたときは「もの静かな女性」という印象を持っていたが，大きな声や体を使った表現で生徒（幼児担当）たちに発声方法を教えている姿は目を見張るものがあった。

一人ひとりの能力，性格を判断しながら，時には優しく，時には厳しく生徒たちに接しているウナーワンさん。そして，彼女に応えようと生徒が必死になって声を出している様子には，単に「先生と生徒」の関係というよりも，「母と子」の愛の絆を感じた。これはウナーワン先生と生徒たちとの関わりが学校の中だけではなく，寮生活（AM5:00起床～就寝）の中で彼女が本当の母親のように生徒たちと寝食ともにしながら生活しているからだろう。

また，副校長先生から，タイ国における聴覚障害者の生活や就業の現状を聞くことができた。タイにはこういった学校が9校しかなく，各地域の全聴覚障害者を受け入れることができないこと，ウナーワン先生のような志を持った先生のなり手が少ないこと，貧困等の理由で学校に入りたくても入れない人たちにはヒヤリング器具の無償サービスや市民（子供）の聴覚検査を行ないながら積極的に地域と密接な関係を築いていること，そして障害者を企業等に受け入れてもらうための法律制定に向けて10年に渡り運動していること等，多くの問題があることと，問題解決のためにこの学校が行なっている地域運動の大切さを理解することができた。

また，耳が聞こえない生徒の問題（動作が乱暴，通じないがゆえのはがゆさから怒りっぽくなること等）を聞いたとき，自分自身を思い出した。

私も，小学校の時におこした病気のために，右側の耳だけだが全く聞こえない。みんなから特別視されるのがイヤで隠してきた。就職しても会話の中で声が聞き取れなくて「えっ！」と何度も聞きなおすことがイヤミにとられ，人間関係が気まずくなったりして辛い思いをしたことがある。

両手が不自由ということは想像を絶する辛さと，それを乗り越えるための強い精神力が必要であり，指導する先生も大変だと思う。この学校の先生たちの志が一人でも多くの人たちに伝わり，生徒たちが自立していくための環境づくりが進められることを望むとともに，できるならば，来年パタヤで開催される聴覚障害者のためのアジア国際会議に参加したいと思った。

次に訪問したのは，若さあふれる好青年サグワンサックさんが働いている心身障害児のトレーニングセンターであった。

彼は心身障害児を社会復帰させるためのトレーニングスタッフである。

手足が不自由な子供や精神薄弱時の子供たちのために，常に行動をともにしながら，食事をさせたり，何かを作成したり，遊んだりしている彼の目を見たとき，富山の精神薄弱児施設を視察した後，涙を浮かべていた彼の顔を思い出した。

この施設も問題を抱えており，特に，敷地が足りなくて遠方の子供たちを受け入れるための寮がないことからサグワンサックさんが毎日早起きして送迎している現状であった。「なぜこの仕事を選んだの？」という問いかけに，「この子たちを救うため。なんとかしてあげたい」と答えた彼の目から，優しさと内に秘めた情熱を感じとることができた。

私の家庭にも，不慮の事故が原因で軽い精神薄弱になってしまった姉がいる。ここ10年間，入退院を繰り返しながら生活を送ってきたが具合の悪いときの姉に接するときは，ささいなことでも大きな影響を与えてしまうので細心の注意が必要である。子供を相手にしているサグワンサックさんの行動，しぐさの一つひとつが，子供たちの社会復帰への道を切り開いていることを実感した。一人でも多くの子供たちが普通の生活ができるようになることを望む。

次に訪問したのは，ヤイマイさんが働いているスラム児童援助財団であった。再会したときの彼女の笑顔がとても印象的だった。

教育面，環境衛生面等，スラムで生活している人々の生活面での問題点が山積する中，ヤイマイさんは人々の問題点や悩みを聞いている。

麻薬中毒の者，教育を受けられない子供に対してケアをしている。

実際に，スラム街の中を歩いて視察した。裸になって遊んでいる子供たち，真っ暗に近い家の中で座っている老人，野原にはゴミの山，飲料水はドラム缶の中のボウフラのわいた決してきれいとはいえない水，栄養が行き届かない食料事情，母乳が出ない母親，麻薬に侵されたされた人…。子供たちを教育していくにはあまりにも悲惨な環境であった。現状を自分の目で視て初めてヤイマイさんの仕事の重要性がわかった。

スラムの人々にとって，ヤイマイさんはなくてはならない存在であるという。生活環境が改善されていくよう彼女たちの頑張りに期待したい。

今回，３人が働いている現場を視察して，そこにどのような問題があってみんながどんな努力をしているのかということ，また，仕事に対する情熱を肌で感じることができた。ただ，彼ら自身の悩みや問題はどうしているのかな…？と心配になった。自分が話しを聞いてあげられればなあと思った。

生徒やそこに住んでいる人々の生活に関わりながら体を張って努力している姿勢は，地域課題を掘り起こし，課題解決に向けた活動を進めていく青年団の一員である私たちが見習わなくてはならない大切なことである。

今回のグループのテーマでもあった「社会福祉」は，高齢化が進む日本において私たちが取り組まなくてはならない重要な課題であるといえる。

このアフターケアプログラムに参加して，「充実した社会福祉」を志している私にとって非常に意義深いものとなった。「この思いを多くの仲間に伝えたい！」こんな気持ちでバンコクをあとにした。

人類の共通課題はたくさんある。障害者福祉，高齢者福祉，医療福祉，環境問題，経済問題，青少年教育，国交問題等，アジアそして世界の平和。

的確に現状を捉えながら課題に取り組んでいく国際活動を進めていきたい。お互いの地域で成果をあげられるよう努力し，協力し合っていくことが国と国との信頼関係を築く礎とな

ることを信じてやまない。

最後に，お世話になったNYB，通訳，訪れた各施設，そして富山を訪れた仲間のみなさんへ，コップン　カー（ありがとう）

「できればこの国に住んでみたい」　　宮本純子　（長崎県企画部国際交流課）

このアフターケア調査は，まず第一に友情計画で日本を訪問した青年達が現在どのように活躍しているかを視察し，さらに彼らとの意見交換やホームステイ等の体験を通して，今後の友情計画による招聘青年達の受入事業に役立てることが目的である。

今回のタイ訪問では前者の目的は達成されたと思う。彼らの職場視察やその他の視察を通して，タイの社会の現状とタイが抱える問題などを理解できたことは，今後のタイの青年達を受け入れる上での予備知識として，大変有意義であったと思う。しかし後者の目的からすると，帰国青年との意見交換の機会やホームステイが無く，十分であったとは言い難い。

タイの同窓会は，組織力がまだまだ不十分のようで，アフターケア調査の受入れを十分に行えるまでには至っていない。それは，タイ側の派遣窓口である総理府青少年局と同窓会との関係が上手くかみあっていない事にも一因があるように思われる。同窓会は，このようなアフターケア調査チームとの情報交換によって，今後の友情計画への参考となる有意義な意見や提言を出すことも可能であろうし，これから友情計画により日本に行こうとする青年達へのアドバイスなど，活躍する場面は多いにあるはずである。また，そのような活動を通して組織も強化されると思うので，今後の活発な活動を期待したい。

今度の訪問でタイの良い所を数多く発見できたのと同時にタイが抱える深刻な問題も数多くあることを知ったのも今回の収穫だった。都市と地方の経済格差からくる貧富の差，スラムの増加，交通問題，環境問題など，また今回の視察を通して特に感じた福祉制度の遅れ，公務員の資質の低下など…。どれ一つをとっても簡単には解決できそうもない途上国共通の悩みがある。急速な経済開発の進展で，いろいろな分野で歪みやアンバランスを生じているようで，それは短期間の視察でも容易に見ることができた。

今回の訪問は，昨年来日した社会福祉をテーマとするグループのアフターケア調査が目的だったので，福祉施設を３ケ所訪問することができた。最初はチョンブリ聾学校，２番目はライトハウス・トレーニング・センター（心身障害者訓練施設），そしてスラム児童福祉施設だ。チョンブリ聾学校は国立で，他の２施設は民間である。これらの視察を通して感じたことは，国の政策が経済開発を優先しており福祉行政は隅っこに追いやられたようなお粗末な現状である。まず数が極端に少ない。そして民間施設に至っては，国の援助は全く無く，個人や企業・団体からの寄附で何とか運営している。さらに職員の数も，給料が安いため希

望者が少なく，スタッフ不足にも頭を悩ませている。何から何まで自分達でやらなければならない。まさに職員の熱意とボランティア精神に支えられていると言った感じである。さらに悪いことには，行政に加えて一般の人々の福祉に対する認識や関心も低いようで，福祉の充実を図るにはまずそういった問題から取りかからなければならず，十分な福祉制度ができるまでにはまだ相当時間がかかりそうだ。私達が訪ねたのはわずか3施設だけだが，このような厳しい恵まれない状況の中で，若くて有能な青年達が献身的に生き生きと働いている姿を見て感動すると共に，将来への希望の光を見る思いがした。

次に今回の訪問で感激したことを2つ上げたい。1つはタイ料理のおいしさである。もともと辛いの苦手で香辛料もほとんど使わない私は，辛いと言われるタイ料理に少々不安であったが，着いた初日から魚介類や野菜類，果物等と材料の豊富さ，味の良さ，値段の安さ（これが一番気に入った。）に感激してしまった。また辛いばかりでなく，甘いものや淡白な味などバラエティに富み，肉中心の洋食より気に入った。米も種類が違うためパサパサとして少し臭いがするが，ソースなどをかけて食べるタイ料理には良く合った。魚で作った醤油（ナンプラー）の味や，汗と涙を流しながら食べたトムヤムクン・スープの味が懐かしい。それにしてもタイ人がこんなに食べることに熱心，というか食べることを楽しむ国民だとは知らなかった。それは味の違いだけではなく，器や飾り付けに凝る日本料理の特徴とは異なり，両方の国民性の違いを感じとても面白かった。

2つめは，町の雰囲気である。排気ガスを吐きながらけたたましく走るサムロやバス，バイク，トラックの群れ，通りにおびただしく並ぶ屋台や露店の列，相手との交渉次第で決まる料金や物の値段（これはやりだすと面白くてやめられない）など，シャレて垢ぬけした都会とは程遠い，何か人間臭さを感じさせる町が気に入った。自動販売機や自動支払い機等の氾濫する日本で，無言の機械と接する事に慣れ，人と話すことを煩わしく感じがちな私達が忘れかけていた人間らしい温かさや，タイ人の生活に対するバイタリティを感じ嬉しくなった。長崎に住む韓国人学生が，日本に来て始めに驚いたのは，マーケットの静かさだったと言った言葉を思い出した。また仕事の関係上，青年海外協力隊事業で開発途上国に行き，協力活動を終えて帰国した隊員達の体験報告を聞く機会が多い。彼らがよく，自分の生涯のなかでおそらく一番人間らしい生活を送った2年間だったろうと話していたのはこういう意味だったのか（協力隊員の努力や苦労を知らずに無責任のようだが）と少し理解できたような気がした。また人と会ったとき，誰もが胸の前で両手を合わせ笑顔で挨拶する様子はとても気持ちが良い。私は是非もう一度この国を訪れたい，出来れば住んでみたいとさえ思った。

「やさしい個人主義の消えた後に」　　市村　聖治　（日本青年団協議会）

● 常夏の国で覚えた悪寒

「こんな国にいると，気が狂うと思ってタイに帰ってきたんだ」３日間だけ我々の通訳を務めてくれたＶ氏は吐き捨てるように言った。27歳。19歳の時に日本に渡り，３年間日本語とコンピューターのプログラミングの勉強をし，その後４年間システムエンジニアとして働いた。

上司が妙な男だった。40過ぎの独身，喜怒哀楽が激しく，時々理由もなく一人でにやにや笑う。「思考回路がコンピューターと同じになっていたんだよ」とＶ氏。自分自身もだんだん感情がなくなっているような気がして退社，逃げるように帰国した。

そして今，彼は日系企業で通訳として働く。労働者のほとんどが現地のタイ人で，日本人は管理するだけだ。

ある日，工場でタイ人同士がけんかとなり，工員が刺し殺された。その時，事後処理に入った日本人の管理者は，面倒くさそうに一言つぶやいたという。「どうせタイ人が死んだんだろ」

ところが，今度は工場での会議中，通訳のＶ氏の目の前で報告中の日本人管理者が卒倒するという事件が起きた。病院に運ばれたが，間もなく死亡。過労死だった。工場をあげての葬式…。「殺されたタイ人の時とは大違いさ」Ｖ氏は興奮する。「日本企業はタイ人を人間だと思っていない。そのくせ，何かミスをすると，いつも秘書や通訳のせいにする。汚いよ！」

一方，Ｖ氏にはどうしても理解できないことがある。タイの外国人の中で，日本人の自殺が圧倒的に多いのだ。

「日本から来たサラリーマンはみんな金持ちで一晩に何千何万バーツ（１バーツ＝約５円）もかけて飲み歩く。豪邸に住み，運転手つきのクルマを持っている。何で自殺しなくちゃならないの？」。

タイには親日家が多い。けれど，彼らでさえ会社を第一に考え，人間性を喪失しながらも働く日本人の姿は，どうしても理解できないらしい。会社のために人間性を喪失し，異国で孤独に生きる日本人。常夏のタイでうすら寒さを覚えた。

● 個人主義と相互扶助

チェンマイでの二日目の深夜，Ｖ氏と激しく議論する場面があった。「政府に不満があるなら，どうして青年を組織化して運動を起こそうとしないんだ」，青年団運動の全国組織の役員として活躍する私たちが詰問する。「おまえは陰口ばかりたたいている。若者らしく正々堂々とたたかえばいいじゃないか」

Ｖ氏は当惑した顔をしたが，最後には開き直り，「この国じゃ，そんなことをしてもムダ

さ」。「おまえがそう言っているうちは，この国はきっと良くならないだろうな」と，吐き捨てるように私たち。酒の酔いも手伝って荒っぽい会話となったが，我々はタイの矛盾や課題を聞いていくうちに，なかなか立ち上がらない国民，とりわけ青年たちへの苛立ちがつのっていた。それは一方で，同様に深刻な日本の青年運動への焦りにもつながっていたのかもしれない―。

我々のもうひとりの通訳Mさんは，タイの個人主義について話す。「政府はコロコロ変わるし，緑の人たち（=軍隊）が権力を握っている。これでは国民は政府を信じなくなります。だから自らの問題は自ら解決していこうとするんです」

一方で，今回のツアーで我々は福祉の現場を数か所にわたって訪ね，お寒いタイの福祉政策の一方で，民間の寄付で成り立っている施設に驚いた。そこでは，所得や人種に関係なく，本当に困った人たちはみんなで助けようという，基本的な精神が生きていた。仏教の影響だろうか，こうしたタイ国民の姿勢はすがすがしい。“やさしい個人主義”とでも名付ければいのだろうか。

● “やさしい”国際貢献をもとめて

さて，この“やさしい個人主義”も，我々帰国直後の3月の総選挙を経て一気に吹っ飛んだ（！？）。選挙後，民政移行を望む国民に対し軍が政権に居座り，若者たちを中心に国民が激怒，大規模なデモがバンコクで組織された。

死傷者が出て，こういう言い方は不謹慎かもしれないが，うちの事務所ではタイ通のスタッフと「タイの青年たちもやる時はやるじゃないか」と感心しあった。最後は，やはり国王の登場で鎮静という筋書き（！？）だったが，タイの“やさしい個人主義”に関しては大いに見直しをせまられた。

というより，本当に“やさしい”人たちは，最終的に個人主義に陥るということはありえないのかもしれない。やさしさと連帯は，常に隣あわせているのだから…。

そして，振り返ってわが祖国日本である。若者たちは管理教育と会社主義のなかで，うすら寒い状況におかれている。「冷たい管理社会」の中で，それを吹き飛ばすパワーをもっているか…。

折からPKO協力法案の審議をめぐって国際貢献がとりだされている。タイの人たちのように，困った人たちを庶民みんなで助け会う実践を，地球を舞台に繰り広げられるか…。

政府段階での施策については今後の議論を待つこととして，私たち民間団体にとっては，第三世界のツアーの人たちと向かい合い，交流しながら，実際に有効な一歩を踏み出すことが，今，求められているような気がしてならないのだ。

# 韓　　国

平成4年2月18日～２月24日

社団法人　勤労厚生協会

# 1. 調査チーム派遣概要

## 1－1　調査チームの構成

| | 氏　名 | 生年月日 | 性別 | （上段）現住所（下段）所属先 |
|---|---|---|---|---|
| チーム・リーダー | 橋本明彦 | 1942年<br>10月25日 | 男 | 〒189<br>東京都東村山市富士見町<br>2－9－16－502<br>財団法人国際協力サービス・センター<br>国際交流部 |
| メンバー | 西宮　崇 | 1961年<br>3月29日 | 男 | 〒192－03<br>東京都八王子市南大沢<br>5－16－3－502<br>財団法人国際協力サービス・センター<br>国際交流部 |
| メンバー | 吉原正道 | 1962年<br>12月13日 | 男 | 〒191<br>東京都日野市東平山2－25－16<br>京王帝都電鉄株式会社運輸部 |
| メンバー | 白岩和広 | 1966年<br>10月1日 | 男 | 〒192<br>東京都八王子市打越町96－1<br>京王帝都電鉄株式会社車両部 |
| メンバー | 堀江晴快 | 1964年<br>3月17日 | 男 | 〒135<br>江東区白河3－5－2<br>岩崎通信機株式会社国際営業部 |

## 1－2　調査日程

期間　1992年２月18日(火)～２月24日(月)

２月18日(火)

10：20　成田出発（JL951便）

12：30　ソウル金浦国際空港着

14：00　プレジデントホテルにチェックイン

16：00　在韓国日本大使館表敬訪問

17：30　プレジデントホテル着

２月19日(水)

10：00　教育部表敬訪問

11：10　延世大学訪問

12：30　教育部主催昼食会

15：00　カナアン農軍学校訪問

17：20　ホテル着

18：00　帰国青年との意見交換会

２月20日(木)

8：30　ホテル出発

11：00　大徳研究団地訪問（標準研究所・原子力研究所見学）

12：40　原子力研究所主催昼食会

13：50　EXPO広報官訪問

15：20　大田鉄道車両整備工場訪問

16：40　大田発

21：20　ホテル着

２月21日(金)

8：30　ホテル出発

10：30　板門店見学

15：00　板門店発

17：00　ソウル着、ホームステイへ

２月22日(土)

終　日　ホームステイ家庭と共に

2月23日(日)

10：00　ホテル集合

11：00　ホテル発

12：50　利川着

13：00　恒山陶藝研究所訪問

15：00　利川発

17：00　ホテル着

18：00　帰国青年との交流会

2月24日(月)

10：40　プレジデントホテルをチェックアウト

12：30　金浦空港着

13：50　金浦空港発（JL952便）

15：50　成田着

1－3　主要面談者

(1)日本大使館

小川郷太郎　公使

鎌田　徹　一等書記官

(2)教育部社会国際局

琴　承鎬　局長

權　黄玉　社会教育振興課長

金　　澈　社会教育振興課行政事務官

(3)延世大學校　企劃室

安　聖一　渉外・弘報課主任

(4)カナアン農軍学校

鄭　周慶　牧師

(5)韓國原子力研究所

南　基俊　原子力弘報室責任技術員

(6)大田鐵道車輛整備廠

宋　命永　管理課長

(7)恒山陶藝研究所

林　恒澤　恒山

權　寧鎬　常務

## 2. 調査の要約

今回の調査団は主に青年招へいプログラムのうち共通プログラムを担当している㈶国際協力サービス・センター職員２名と平成３年度受入れ韓国青年、特に勤労青年グループの合宿セミナーに参加した日本人青年３名の構成であった。

韓国青年の招へいは今年度で第１フェーズ５ヶ年間を終了し、政府原案ではあるが来年度以降第２フェーズを実施する予定であることから、引き続き派遣予定の実施調査に向けて先方の意向の調査、および第２フェーズの実施に関しプログラム内容の改善に資する情報の収集、帰国青年との再交流を主たる目的とした。

過去の歴史的背景から、同国の対日感情には複雑なものがあるが、最近大々的に報じられた第２次大戦中の慰安婦問題等も加わり、訪韓にあたっては若干の懸念はあったが、韓国側関係者は細心の心配りで調査団を遇してくれ、特に訪問先の選定とアレンジ，ホームステイ先のアレンジなど感謝にたえません。心より御礼申しあげます。

## 3. 現地活動報告

### ３－１　表敬・訪問先における意見交換内容

①２月18日(火)　於：在大韓民国日本国大使館

同大使館広報文化院を訪問し、小川郷太郎院長（公使)、および当プログラム担当の鎌田徹一等書記官に表敬、意見交換を行った。

先方より同国政府は本件プログラムを高く評価しており、又大使館としても対日感情厳しい折、本プログラムの重要性は益々高まったおり、第２フェーズが予定されていることは大変有難いとのコメントがあった。特に院長より交流報告書は一般韓国青年の対日理解の上で非常に有益であると思われるので、できるだけ多く送って欲しいとの要望があった。

なお調査団出発前に、第２フェーズより韓国側本プログラム窓口機関が、従来の教育部より体育部に変更になるとの情報があったが、最終的には引き続き教育部が担当することで決着した由である。プログラムの継続性の面からはわが方にとっても朗報と思われる。

又鎌田書記官より、本プログラムとは別に日韓の地方自治体レベルでの交流会議が発足し、将来の日韓交流はより活発化するのであろうとのコメントがあった。

②２月19日(水)　於：教育部

本プログラム韓国側責任者である社会国際教育局琴承鎬局長、社会教育振興課権黄玉課長、

同課金澈事務官に表敬し意見交換を行った。

冒頭同局長より以下のコメントがあった。

1）過去5年間のJICA青年招へい事業は韓国において大きな効果を上げており、深く感謝している。

2）できれば韓国側でも日本人青年を招へいしたい気持ちはあるが、予算の関係上実現できないのが残念である。

3）日本側で第2フェーズも継続する方向で検討されていることは非常に喜ばしく、期待している。今後は量よりも質を重視していきたい。同局としてはもっと深く韓国の事情を知ってもらうため、在日韓国人が通学している高校の日本人教師招へいの計画を有している。

当方より第2フェーズ実施調査団の派遣予定を非公式に伝え、従来参加青年の分野が多岐に亘り、プログラム調整に困難が生じていた勤労青年グループの年度別・分野別の受入れ方式を打診したところ、一考に値するので検討してみるとの回答があった。

又帰国青年に対し何らかの義務を課しているかとの当方質問に対し、同局長はレポート提出を義務づけており、又ボランティアベースで特に本プログラム参加日韓学生間の交流が帰国後も進んでいると承知していると述べた。

③2月19日(水)　於：延世大学

わが国でもよく知られている私学の名門校であり、キリスト教精神に基づく教育を行っている。開学後108年目を迎える総合大学で、民間を主体として多くの指導者を送り出している。開学の性質上米国との繋がりが深く、学生の留学は米国が主体の由。時間の都合により概略の説明を受けたのみで、学生との対話ができなかったのが残念であった。

④2月19日(水)　於：カナアン農軍学校

キリスト教精神に基づき、軍隊式精神教育を行う私設学校であり、年間8千名強の生徒を受け入れている（1週間単位)。

一種の世直し運動の一環として物質的、精神的貧困感からの脱却を目指す精神道場との由であるが、現実には企業の社員教育の場として利用されているように思われる。韓国では最近のわが国の時短運動とは逆に、“あと30分長く働こう”との政府キャンペーンをテレビを通して行っており、労働意欲高揚に力を入れている事情も背景にある感じを受けた。

⑤2月20日(木)　於：大徳研究団地

ソウル市南方約170㎞大田市にある研究団地であり、わが国の筑波研究学園都市には相当する。現在30万坪の土地に27研究機関があり、5万人の関係者が居住している。今後は23の研究機関が新設予定との由。韓国の先端技術開発に向ける意気込みが感じられる。計量研究所において数名の参加青年に迎えられたが、同研究所は部外者立入り禁止とのことで（軍事上の機密事項があるものと推測される)、原子力研究所へ案内された。同研究所広報室技術者より重水型原子炉（HWR）制御棒製造過程の見学説明を受けた。

同団地では1993年8月7日より11月7日までEXPO'93が開催されるとのことになっており、EXPO広報室に案内され、広報官より日本語によるプロモーションビデオ（コンピュータグラフィックスによる）を使用した説明を受けた。パビリオン等の建設はまだ緒についたばかりとの感があるが、日本からの見学者来韓に期待している由である。

⑥2月20日(木)　於：大田鉄道車両整備所

韓国鉄道庁は日本にあてはめると昔の国鉄ということになる。韓国は日本のような私鉄がなく全て国鉄の路線であり、他に知る限りでは、ソウルと釜山に地下鉄が数本走っているだけである。電化率もまだ低く（20%位)、単線区間も長い。日本とはまだほど遠いレベルだと感じた。国鉄ということで、親方日の丸的発想なのか、経営状態はあまり良くないそうで、体質を改善するために国営から公社化されるという。大田の工場では客車の保守・整備・保線・鉄道用品の製作などが行われている。所内は27万3千坪あり、1070名が働き、年間4、

5千両の客車・貨車の整備が行われている。ここはこれから日本のJRグループのように変わって行くのだろうか、興味深いところである。

⑦2月21日(金)　於：板門店

軍事境界線に入る前には写真撮影の禁止等厳しい注意がガイドよりあったが、現実には最近の南北対話等を受けてさしたる緊張感は感じられなかった。むしろ日本人団体観光客がかなり多く、観光地化の感さえある。東西の壁が取り払われた現在、板門店も近い将来歴史上の場所となる可能性を感じさせられた。

⑧2月23日(日)　於：恒山陶藝研究所（利川）

利川はソウルから南へ約60キロメートル離れていて、陶磁器の産地として名高い所である。私達一行を利川の小学校の校長先生と教育委員会の方が出迎えてくれた。利川は陶磁器用の良い原料土と、清い水と、器を焼くための燃料用の赤松の産地なので、多くの窯元が点在している。(赤松は油分を多く含有し陶磁器を焼くための高温（約1300度）が得られるそうである。しかし最近はガスで焼くものも多いという。）私達の訪問した「恒山陶藝研究所」では、林恒澤という高名な陶芸家の先生の話を伺った。陶磁器を作る工程はどのような物でも、だいたい同じであるそうだが、良い者を作るためにはその要所要所で大変な労力と神経と技を注ぐのだそうである。それでも作品として完成するのは四分の一程度だけで、失敗作は壊してしまうのだという。一流芸術の道の厳しさに感じ入った。

3－2　帰国青年同窓会等の活動状況

昨年の報告同様、韓国では未だ帰国青年同窓会の組織作りは未整備のようであるが、交流会参加者に代表されるように、ソウル近郊在住者を中心として一部ではあるが横の繋がりを保っている様子も窺えた。本事業は第1フェーズが終了したことでもあるし、第2フェーズの展開に向けて他国同様同窓会の組織化が望まれるところである。

3－3　セミナー・交流会実施状況

〔2月19日(水)および2月23日(日)〕

本年度の帰国青年、および教育省權社会教育課長他同省関係者を交え2回に亘り意見交換会、および交流会を行った。

出席者よりの主な発言内容は次の通り。

1）訪日前は自分の家族の中に日本軍より被害を受けた人もおり、日本の印象は90%悪いものであった。日韓は地理的には近いが、過去の何人かの政治家のために、遠い国になってしまった。しかし訪日後はかなり自分の認識に変化が生じた。自分は教師であるので、学生に現在の日本像を話すよう努力しているが、慰安婦問題等が話題になると、訪日経験のない学生に納得させるのは大変である。

青年招へい事業等で、できるだけ多くの青年が訪日することにより徐々に対日観が変化することを期待している。

2）ホームステイ等を通して、日本人が思ったより質素で堅実な生活をしているのを見て訪日前悪かった対日観が非常に良くなった。

同僚には未来に向かって日韓関係を考えようと話している。

3）韓国、中国については、日本との間に壁があるのは事実である。それ故に相互の交流の重要性がある。訪日して国民は必ずしも金持ちの生活をしているではないことが分かり親近感を持った。日本は貧富の差がないのが素晴らしい。

4）帰国後将来の日韓関係に確信を持ちたいと思って訪日した。日本の学生との合宿セミナー等を通して、日本人学生の生活、考え方が良く分かり有意義であった。より多くの日本人との接触が必要であることを痛感した。日本人学生は韓国のことを良く知らないと思っていたが、合宿セミナーに参加した30名の日本人学生のうち、16名が韓国を訪問してくれ、再交流の機会を持った。「百聞は一見に如かず」であり、嬉しかった。調査団には独立記念館も見て欲しい。

5）現在のプログラムは、全体として良くできている。共通プログラムでは「日本の政治」の講義が欲しい。日韓関係については本音で話をして欲しい。施設見学は韓国では見られない所、例えばハイテク産業、又は日本人の精神が分かる所、例えば博物館、歌舞伎等を見たい。共通プログラム以外では合宿セミナー同様、できるだけ多くの日本人との話し合いの機会を設けて欲しい。スポーツ交流を通したスキンシップも重要である。

出席青年の意見は、概ね上記の発言で集約できるように思われる。わが国に対する一種の親近感と過去の日韓関係が錯綜して対日観を形成しており、一朝一夕に変化を求めることは困難であると思われるが、帰国青年は確実に知日派としてオピニオンリーダ的役割を果たしている。又私的レベルでの再交流も活発に行われている事実から、本事業がきっかけとなり、それまで白紙の対韓観に近かった日本人青年の中に、より韓国を知ろうとの動きが出てきているものと思われる。

最後に、同席した權課長の「韓国青年が日本人と対等の立場で堂々と対話できるようになるためには、過去への過度な拘泥を払拭する必要がある。」との主旨の発言が印象に残った。

3－4　ホームステイ実施状況

〈ホームステイ名簿〉

橋本　明彦　：　金　鎭成（KIM JIM SUNG）氏　教育部大学政策室教育研究官

西宮　崇　　：　朴　眩雨（PARK HYUN WOO）氏　1991年度教員参加者

吉原　正道　：　洪　南杓（HONG NAM PYO）氏　1991年度勤労青年参加者

堀江　晴快　：　韓　仁洙（HAN IN SOO）氏　1991年度教員参加者

白岩　和広　：　申　　洺（SHIN MYON）氏　1987年度勤労青年参加者

短期間の日程の割にはホームステイが２泊設定されており、団員各々が有意義な体験を持つことができたと思う。受入家庭の選定に当たっては韓国側の細やかな配慮があったようである。5.調査チーム参加者の感想欄にその詳細を記す。

## 4. 訪問国おける青少年団体の活動状況

今回の調査では日程上の制約もあり、残念ながら青少年団体を視察する機会には恵まれなかった。韓国教育部としては可能な限りのプログラム策定であった様子でもあり、次回の調査に期待したい。

## 5. 青年招へい事業に対する相手国側の評価

前述の教育部琴局長のコメントにもあるとおり、本事業は韓国において高い評価を得ていると言える。特に青年たちにとっては、いわゆる『対日感情』の転換という点で、来日経験がもたらすものには計り知れないものがあるということが今回の調査で実感できた。韓国の青年たちは我々が考える以上に現実的な面を有しており、また柔軟な思考の持ち主でもある。彼ら一人一人が将来に向けて日韓関係の改善・向上を指向しているのは明らかであり、その意味で本事業は実に意義深いものであると言えよう。

## 6. 調査チーム参加者の感想

(財)国際協力サービス・センター　橋本　明彦

私のホームステイ先は、教育部大学政策室教育研究官　金鎭成（Kim Jim Sung）氏のお宅であった。

ハン川沿いの高級マンション内にあり、窓からハン川を行き来する遊覧船が望め、市内から車で数十分の距離にあることから明らかに少なくとも中流の上クラスの家庭であることが窺える。

ご主人の金鎭成氏は物静かな紳士であり、奥様と長男、長女（２人共延世大学生）との４人家庭は落ち着いた良家の雰囲気を漂わせている。

金鎭成氏と奥様は英語が苦手であることから、必然的に２人の大学生との会話が主体になる。

長男（経営学部３年生）は将来貿易関係ビジネスマンになることを希望しており、長女（文学部ドイツ語学科４年生）は英語の先生になることが夢である。

２人共好奇心旺盛で、私が韓国のことを質問するよりも、彼等の日本及び私が過去滞在あるいは訪れたことのある国々に関する質問に答えるのに終始する形になってしまった。

奥様とお嬢さんは朝から１日がかりで韓国の正月料理を作って待っていたとのこと、韓国流の心配りがさり気ない形でそこここに感じられ、非常に心地よい滞在となった。

翌日は鎭成氏は運転手に徹し、長男のガイドでソウル市内観光（ハン川遊覧を含む）となった。

長男との会話は言葉の障害があるものの、経済、政治、社会と広範囲に及んだが、私と彼との年齢差が大きいこと、韓国流の年長者に対する遠慮があること、客に対する心遣い等により、私が終始話をリードすることになったのは止む得ないことかも知れない。

いずれにしてもこの年齢になり生まれて初めての“いわゆるホームステイ”は、言葉の通じなかったご夫妻も含めて私の心の中に御一家のあたたかい厚意を強く印象付けるものとなった。

㈶国際協力サービス・センター　西宮　崇

２月18日。降り立った金浦空港は独特の匂いに満ちていた。ニンニクやキムチ、人参といった単語が頭を過ると同時に、韓国人の反日感情についての昨今の囂しい報道ぶりが思い起こされ若干憂鬱となる。しかしそんな気分も出迎えて頂いた韓国教育部（日本の文部省に当たる）の金さんの人懐っこそうな笑顔が払拭してくれた。これならいけそうだ。

大使館表敬に始まった今回のスケジュールは思っていたよりもハードで、メンバーの疲労度は日を追って増していくようであったが、逆に過去本事業により来日した青年達の気持ちがよく理解できたのも事実である。（我々は僅か１週間だが彼らは１ヵ月の滞在なのだ。）また随所に韓国側の我々に対する配慮が窺われ、行く先々で受けた歓待の数々は却ってこちら側が恐縮してしまうほどであった。

寒風吹き荒ぶ板門店は、緊張した面持ちで臨んだ我々の期待を見事に裏切り（不謹慎かもしれないが）、多くの観光客が訪れる観光地然とした所であった。我々５人のメンバーは金沢の自営業者の団体と共に専用バスで中を巡ったが、意外なほど緊張感が欠如した印象を受けた。しかしそれも南北統一の気運のひとつの表れであるのかもしれない。

そしていよいよホーススステイ。私がやっかいになったファミリーは、昨年教員グループの一員として来日した朴さんのお宅である。高校の化学教師である彼は、家への道すがら私にあまり上手とは言えない英語を一生懸命使って（勿論それはお互い様であったが）、日本からの客を迎える夫人の不安な様子を述べ、また家の狭さをさかんに詫びるのである。素よりそんなことは一向に気にならないウサギ小屋在住の身であるが、私は一遍で彼の人柄が好きになり、また日本人と韓国人の心遣いの近似性を感じた。ソウル郊外の２ LDK のアパート（日本の公団住宅に似た造り）に夫人と娘、祖母の４人で住む彼の暮らしぶりは、我が身に比べ確かに質素に映ったが、夫人の手料理はどれも美味であり、何よりも家族愛に満ちたものであった。そして訪日経験が彼の日本に対するイメージをマイナスからプラスへ転じさせたという話が聞けたことは何よりも嬉しかった。

今回の訪韓を通じて感じたことは、日韓両国民が互いに抱く感情の根底には言わば近親憎悪とも言えるものであり、それは何か契機がありさえすれば止揚できるのだということであ

る。そしてこの「21世紀のための友情計画」が確実にそれに寄与するプログラムであることを実感できたこと、それが私にとって最大の収穫であった。

京王帝都電鉄株式会社　吉原　正道

90年、91年と２年続けて㈳勤労厚生会主催の韓国青年との合宿セミナーに参加して以来、すっかり韓国に魅入られてしまい、91年４月にプライベートに韓国を訪問している。今回は韓国側で設定してくれたプログラムの中からなにか新しい発見があるだろうという期待と、91年夏に来日した韓国青年との再会を期待して韓国に旅立った。延べ一週間に渡るスケジュールをこなして、帰国したわけであるがその中でも比較的印象に残った項目を抜粋して延べてみたい。

①板門店

今回のプログラムの中で最も期待を抱いていたのは、板門店訪問であった。ドイツ統一後、唯一残る分断国家の国境であり、戦後の歴史の表舞台に足を踏み入れる貴重な機会だからである。板門店はソウルの北50kmに位置し、車で約１時間の距離にある。ソウル～板門店間は統一路と呼ばれる国道１号線で結ばれている。統一路には北側からの侵略に備え、いたる所にアーチ型の門が設置されており、非常時には道路を寸断することができるようになっている。統一路という名がつきながら一方では侵略に備えた建築物があるという事実には、まさに歴史上の悲劇が感じられた。当日は雪が降った関係で道路が渋滞し、現地到着がかなり遅れた。板門店では共同警備地域、自由の家、展望台等を見学した。共同警備区域内には売店・レストラン等があり、売店には日本語を上手に話す店員さんがいて、次々に訪れる観光客相手に手際良く商売をしていた。(我々も紛れもなく観光客の一員であった)。訪れる前はもっと緊張間の漂う一般社会とは掛け離れた場所を想像していたので多少、俗化されている印象をもった。途中、展望台からは国境線を隔ててそびえ立つ北朝鮮の国旗や村の様子を見ることができた。韓国側にも国旗を掲揚する大きな塔があるが、塔の高さは北朝鮮側の方がかなり高いということであった。また、共同警備区域内では、韓国、北朝鮮両国の兵士を間近にみることができた。韓国軍兵士は皆ハンサムで体格の良い兵士ばかりであった。ガイドさんに後で聞いてみると板門店に駐屯する兵士は頭脳明晰で容姿の優れている人を選抜しているとのことであった。同一民俗で構成されていた国家が他国の都合により分断を余儀なくされ、その国力を国旗の大きさや兵士の容姿・体格といった外見上のもので表現するという事実は、互いの国に対する情報が極端に少ないとはいえ悲しい事実であると感じた。私自身の考えとしては近い将来、２つの国の統一は実現されるものと思う。そして板門店もベルリンのような過去の遺物になる時がくるであろう。その時には、板門店へ言ったことを思い出し同じ単一民俗国家に生まれた人間として、分断の悲劇と平和の大切さを再認識するようにしたいと

思う。

②ホームステイ

今回のホームファミリーは洪　南杓（HONG・NAM・PYO）氏（31歳）一家であった。洪氏は91年度の韓国青年招へい事実における合宿セミナーで私のルームメイトであり日本流に言えば、気心の知れた間柄であったので友達（と言っても失礼かもしれないが）の家へ行くような気持ちで2泊3日ほどお世話になった。彼の家は韓国一高い63ビルの近い3 LDKのマンションで、家族構成は本人・奥さん・娘さん・奥さんの妹の4人家族であった。家にはリモコン付きカラーテレビ・CD・コードレス電話等があり、年齢の割には裕福な暮らしをしていると感じられた。（彼は韓国一の名門ソウル大学を卒業したエリート公務員である。）当日は、彼が景福宮まで車で迎えに来てくれ家へ向かった。家に着くと、まず夕食を摂ったが、それは一般家庭の普段どおりのものという感じであり、それまでは韓定食ばかりだったので、とてもおいしく感じられた。その後はテレビを見ながら日本に行ったときの事などを話したのだが、コミュニケーションは、日本語（彼は訪日後、日本語を勉強し始めたとのこと）および韓国語（私もラジオ講座で多少韓国語の勉強をしている）で、ニュアンスがわからない点があると英単語が出てくるといった具合である。そして1時間位話をしているところへ、奥さんの妹さんが会社から帰って来て私達の話しに加わった。彼女はドイツ系企業で秘書をしている才媛で、かつ私の知っている韓国人女性の中では最も日本人的な顔立ちをした美人であり、実際、旅行で香港やシンガポール等へ行った際には日本人に間違えられてばかりいるという。家族全員が勢揃いしたところで、我々は近くにある63ビルに出かけた。63ビルは日本でいえばサンシャイン60のような所で、展望台をメインに水族館・映画館といった娯楽施設と会社・売店等のテナントが入ったビルである。私たちはそこの展望台でソウル市の夜景を楽しんだ後、レストランで軽く食事をして帰宅したが、その日は私も疲れていて11時ごろ寝てしまった。翌朝は8時頃に起きたのだが、残念なことに美人の妹さんは友達と釜山まで出かけてしまった。朝食後、私たちは車で韓国民族村へ行くことになり、用意をしてマンションの駐車場に行ってみると、駐車場には所せましと無秩序に車がとめてあり、一瞬出かけられないのではと思ったのだが、彼と奥さんは、涼しい顔で他の車を押しだしたのである。どの車も、サイドブレーキを引いていないため押せば簡単に動くのだが、韓国の駐車場（もしかしたら、このマンションだけかもしれないが）は特に駐車場所が指定されておらず、敷地内の好きな所に車を停め、他の車が出られるようにサイドブレーキをひかないでおくのが暗黙のルールになっているのである。これは考えようによつては、狭い敷地を有効に利用する良い手段だとも思えた。そしてようやく車を出すと、私たちは民族村へ出発した。民族村は高速道路で約1時間の距離にあり、韓国古来の村の様子を再現した場所で、韓国の人はもとより欧米からの観光客や我々日本人（当日はどこかの相撲部屋の力士達がいた）な

ど様々な人達が訪れていた。この村の中では、実際に人が生活しており、それぞれの家で作った民芸品を売っているのである。民族村を一通り見学した後、私たちはソウル市内にもどり漢河の遊覧船に乗ったが、遊覧船にはカップルで来ている若者が多く、韓国の若者はここで勝負をかけるのか？と感心してしまった。遊覧船に乗った後は家の近くの食堂で夕食を摂ったが、ここでは本場のビビンバを食す機会に恵まれた。韓国のビビンバは日本の物とは違い、土鍋のような物で暖かいまま出てきて、ビビンバ（韓国でご飯を混ぜるという意味）の言葉どおりスプーンで跡形もなくかきまぜて食べるのである。見た目には美しくないのだが、実際食べてみると様々な味が上手く調和して、とてもおいしいものであった。今回の韓国訪問の食事の中でもう一度食べたいものを挙げろと言われれば、真先にこのビビンバを挙げたいと思うぐらいおいしく感じられた。食事をした後、洪さんが韓国式スタンドバーへ行こうと言うのでタクシーをつかまえ夜の街へと繰り出した。そこはスタンドバーというよりカラオケバーとディスコとスナックをたして３で割ったような場所で、お客さんは、入場すると一旦カウンターに落ち着き、気分次第で前方にあるステージで踊ったり、演奏をバックに歌を歌うといった、とてもエネルギッシュなバーであった。韓国の人達が一様に歌が上手いのは、持って生まれた資質の他に、このような所で我先にと歌う習慣があるからなのかと私は感心してしまった。一通り夜の街を楽しんだ後は、家に戻り洪さんの大学時代から今日に至るまでのアルバムを見せてもらった。学生時代の写真は日本の大学生と同様、学友と楽しげに写っているものが多いのだが、徴兵時代の写真は軍服姿でとても精悍であり、韓国では軍隊経験のない男は一人前と見なされず結婚もできないといわれるのも無理がない思った。また、家のいたる所には結婚式と家族全員の写真が飾ってあったが、以前、訪問したことがある別の韓国人家族でも同様に写真が飾ってあったことを思い出し、韓国の人は、我々日本人よりも家族を大切にし、かつ誇りにしているのだなと感じられた。この２泊３日のホームステイでは一般家庭の普通の生活を家族の一員として過ごしたため、特に外国の家庭を強く意識することはなかった。もし彼らが日本に来るチャンスがあれば、是非我が家に来てもらい、構える事なく日本人に一般的な生活を体験してもらいたいと思っている。私は、このように異文化を体験・吸収するチャンスとしてホームステイを体験できたのは素晴らしい経験だったと感謝し、また、見るもの・聞くものが全て珍しいという段階が終わったら、次は同様な習慣・文化の微妙な違いを理解し、外国に対する興味のレベルを少しずつ高め、深めていきたいと感じている。

③韓国の友人との再会

今回のプログラムでは、２日目と６日目の夜に来日青年と会う機会があった。訪韓前に予め何名かに手紙を出しておいたこともあってか、ソウルのみならず仁川・大田といった街からも我々に会いに集まってくれ、韓国青年の人間関係を大切にする点には大いに学ぶ物があ

ると感じた。今回集まってくれたメンバーは91年夏に招へい事業で来日した青年のべ11名と来日メンバーの友人で92年1月まで日本に留学していたユンさんであった。プログラム上では意見交換会となっていたが、堅苦しい感じではなく、クラス会のような雰囲気であった。彼等のうち数名は再び日本に来たいと言っていたので、その際には韓国青年に負けないよう、日本青年もOB会等を組織して横の連絡を密にして彼等を迎えられる体制づくりをしていく必要があると感じた。彼等と別れる際に言った（トッマンナプシダ・またお会いしましょう）の言葉を嘘にしないよう、韓国もしくは日本での再会を計れるようにしたいと私は思っている。最後に一つ心残りだったのは、昨年韓国に行った際に私を案内してくれたメンバーに会えなかったことである。

今回は、2回目の訪韓ということもあり、スケジュールも最後の方になると、外国に来ているという意識は極めて薄くなっているのを感じたが、それは基本的に文化が似ているため見聞するものを珍しく感じなくなってきたせいであろう。ただの旅行先という観点で考えれば、韓国に対する興味は既に十分に満たされたのかもしれないが、日本に帰って来ると、なぜかまた生きたいと思えてくるから不思議である。韓国にある友人の存在がそのような気持ちをかりたてるのか、もしくは極めて似ていながら微妙に異なる文化の違いに興味が尽きないのか。理由はいずれにしろ、自分自身の芽生えた韓国という隣国に対する興味・友情はいつまでたっても持ち続けていきたいと思う。最後に今回のこのような機会を与えてくださった皆さんに深く感謝の意を申し上げ今回の報告を終わりたい。

岩崎通信株式会社　堀江　晴快

平成4年2月21日、板門店視察からの帰り道に、市内の中心に位置する博物館前の広場で、各々のメンバーは韓国教育部がご手配下さった家族に出迎えられて、期待と不安を抱きながら2泊3日のホームステイへと別れて行きました。

私をお世話して下さったのは、ソウル市内から車で南へ約1時間の水原市にお住まいの韓仁洙さん（35才）ご一家でした。韓仁洙さんは平成3年度の「21世紀のための友情計画」の教員グループのメンバーとして来日されましたので、その一ヵ月間の思い出を懐かしそうに幾度も話して下さいました。。

韓仁洙さんは私立高校の英語の先生で、シェークスピアを中心に大学院では16世紀のイギリス文学を専攻されていたとのことで、家の中には英文学や歴史書など文献がたくさんありました。

お住まいは15階建ての高層アパートの最上階にあり、奥さんと男の子と女の子の4人家族で、インテリアや家電機器についても日本の団地の雰囲気と全く変わらない様に思われました。

けれども、冬の寒さが厳しい韓国ならではと感じたものは、この様な高層住宅の床にもス

チームパイプ式のオンドルが設置されていることと、冷たい外気を遮断するためベランダは完全にガラス張りになっている、いわゆるサンルームの様な構造でした。

奥さんの権蓮鮮さんは専業主婦ですが、とても明るい方でいろいろと気を遣って下さいました。韓仁洙さん宅に着くと暖かく出迎えて下さり、玄関を入るとすぐ左手の三畳程の部屋に私を案内して、パジャマはこれを、靴下はこれをと用意して下さっていて、ともかく恐縮してしまいました。

金善煌さんは、韓仁洙さんと同じ私立のキリスト教系の三一高校の韓国語と日本語の先生で、私が滞在するのに韓仁洙さんとコミュニケーションが十分に取れないのではと、心配してわざわざ訪ねて下さいました。金善煌さんは日本に行ったことはないとおっしゃっていましたが、本当に日本語がお上手で、先生にふさわしい誠実な方でした。

さて、はじめてオンドルの床の上で寝ることとなりました。寝方は以外にも簡単で、床の上に薄い布団を強いて、後はタオルケットの様なものを上に掛けるだけで十分暖かいのには驚きました。けれども正直言って、慣れない私にはちょっと熱すぎると思いました。

以前韓国の友人が冬に東京に来た時、日本にはオンドルがないから寒くて眠れないと言っていた気持ちが、とてもよくわかりました。確かに小さい頃からオンドルの上で寝て育った韓国の人達にとっては、日本の様に寒くても布団だけくるまって寝るというのはきっと辛いことに違いありません。

日本では古来より「住まいは夏を第一に」と言った言葉が建築の基本となって来た様ですが、私は韓国の伝統的な家屋に泊まった訳ではありませんが、この国ではきっと「住まいは冬を第一に」なんだろうと勝手に想像していました。

日本の湿度の高い夏は、とりわけクーラーが無かった時代はなおさら、厚さを凌ぐことに重きを置いたのでしょうが、韓国では古くからその寒さ対策から生まれたものがオンドルだったのでしょう。日本ではストーブや炬燵が主流でホットカーペットなどの床暖房器具は最近やっとはやり出して来た様な気がします。

22日は水原市から車で更に南へ2時間程のところにある温陽の独立記念館を見に行きました。韓仁洙さんは日本から客人が来たら、絶対にここにつれて行こうと考えていた様です。この日は韓仁洙さんとふたりのお子さんと私の4人で出掛けました。

行く途中、車の調子が良くないと言うのでカーショップに寄ったのですが、そこで売っているルームミラーやルームライトなどのアクセサリーは全て日本製で、韓国仕様ではなく日本国内のものがそのまま韓国へ輸入されて来たのだと知り、大変驚きました。街中ハングルだらけの韓国で、日本語で書かれた商品を見てなんとなく懐かしいとも珍しいとも感じました。

昼食は温陽のごくありふれた小さな食堂で取りましたが、店の雰囲気は日本のよくある大食堂と全く変わりありませんでした。

ここで麺類とキムチをおいしく食べることができましたが、メニューが全く分からない私のために、韓仁洙さんはあまり辛くないものを選んで注文して下さった様です。

独立記念館は、1987年8月15日に韓民族の独立精神を後世に伝えるために開館したそうです。大部分が芝生に覆われている121万坪という広い敷地の中に独立記念堂と7つの展示館が建っており、記念堂のすぐ前から大極旗が左右側に10メートル間隔で　。か前方まで連なっていました。

私たちは始めにここの敷地を一周するトラムカーに乗りましたが、その時の気分はさながらディズニーランドで5つのテーマランドの中を軽快に走り抜けて行くトラムに乗っているかの様でした。

展示館の中は大変近代的で、LEDの電光掲示板に地図が歴史と共に移り変わる様を描き出し、展示品は全て韓国語と英語の解説が施されていました。原始時代から高句麗、百済任那の三国時代を経て、いわゆる「日帝時代」へと史料が展示されており、短時間で韓国史を学ぶには最高のところと言えるでしょう。

しかしながら、やはりこの記念館は日本の36年間にわたる支配に対する恨みを永遠に忘れないために造られたという感じが強く、蝋人形によるその当時の描写が、日帝時代に日本人が韓国人を殺してばかりというのは、少し残念な気がしました。

せっかく多額の費用を投じてこれだけの博物館を造り上げたのなら、もう少し考古学的文化人類学的に世界が注目するような内容に重点を置くと、一層価値有るものになったことでしょう。

韓仁洙さんは写真がお好きとのことで、この日も日本に行った時に買ったというお気に入りのミノルタの一眼レフで、ふたりのお子さんと一緒に私の写真をたくさん撮って下さいました。

そして帰りに独立記念館の売店で、韓仁洙さんは記念堂をモチーフに型どったペン立てを買って下さいました。

渋滞の激しい高速道路を北へ向かって走り、8時近くにやっと家に辿り着くと、大田市にある大学で寮性格をしているという韓仁洙さんの弟が、遊びに来ていました。弟さんも韓仁洙さんと同じく英文学を専攻しているとのことですが、4月から大学を休学して空軍の兵役に就くことになったと言っていました。

国民皆兵制度を採用している韓国では、男性なら特別な事情がないかぎり「国防」という美化された名目のために、貴重な青春時代の2－3年を国のために捧げる(?)などということも、南北対立から生まれた有り難くない副産物なのでしょうが、こんなものはめでたく南北が統一された後には、単なる歴史のひとかけらとして問題にすらされないのかもしれません。

そして更に嘆かわしいことは、その敵対関係にある相手は異民族でも異国人でもない、自

分達の親類であることではないでしょうか。こんな無意味で馬鹿げた「滅私奉公」が社会的義務になっていない我々日本人は本当に幸せというべきではないでしょうか。

夕食に奥さんはわざわざおでんを作って待っていて下さいました。中の具は日本のおでんと全く変わりありませんでしたが、口にした途端「甘い！」と言いたくなる様な味付けでした。けれどもその心遣いにはただ感謝の一語に尽きました。

しかし、豚肉をフライパンで醤油味に普通に炒めたものを「プルコギ（焼肉）」と言って出されたのを見て、正直言って私はショックでした。

これは全く当たり前のことで、焼肉レストランの様に直火で焼いて、焼肉のためを付けて食べるものだけが焼肉という形に拘った固定観念があった私の方が愚かだったのは、言うまでもありません。プルコギとカルビの違いが分かったのはこの訪韓の収穫と言えます。また、韓国人が海苔を日本人と同じくらい、あるいは日本人以上によく食べるのには驚きました。日本では、海苔は主に朝食の友という感じがしますが、韓国では毎食のようにかなり沢山食べる様です。

韓国の焼海苔は普通塩味が付いているので、日本の様に醤油を付けません。私の勤務先の韓国の代理店の方が来社される時は、いつもおみやげに海苔を持ってきて下さるのですが、始めて見た時焼海苔の表面に粒塩が付いていたのが印象的でした。

夕食後は、韓仁洙さんのご家族と一緒に「元祖、韓国の双六」と言うべきゲームをして楽しいひと時を過ごしました。

楕円形の中に十字型を描いて、その線上に小さい丸を沢山付けて駒を進めていくものです。サイコロの代わりに直径３センチ、長さ15センチ程の木の棒を４本投げます。棒の一部が削ってあって、その面が表になった数だけ駒を進めるというもので、「回り将棋」の様なやり方です。

韓仁洙さんは、この韓国双六のサンプルを紙に描き、木の棒の一本一本に家族４人の銘々の名前と誕生日を書いておみやげとして下さいました。

翌朝、韓仁洙さんは私をソウルのホテル・プレジデントまた地下鉄で送って下さいました。日曜の朝であったので、車内は比較的空いていて、趣は日本の地下鉄とさほど違いませんでしたが、車内でスポーツ新聞を売り歩くサービスは日本では見掛けないものと思いました。

今度韓国に来たら必ずまた寄るようにと言って下さった韓仁洙さん、おかげ様で単なる観光客では味わえない貴重な体験ができました。次回お会いする時には韓国語で何でも語り会えるように、韓国語をマスターしたいと思っています。

京王帝都電鉄　白岩　和広

成田空港を発ち２時間あまり。私達一団は金浦（キンポ）国際空港へ到着する。ここは東

京よりも寒く、空気が乾いている。ソウルは東京よりも北に位置している。韓国側の代表のお出迎えを受け、バスでソウル中心の宿泊先ホテルへ向かう。バスの中から町並を見てみると、日本のどこかの都市だと言ってもわからないくらいよく似ている。日本とはっきり違うところといえば、車が道路の右側を通行していること。街中の看板が韓国固有の文字であるハングルによって埋め尽くされていることなどが挙げられる。バスがソウル中心に近づくと、高層ビル群が建ち並び、その一方では、景福宮（キョンブックン）や徳寿宮（トクスグン）と呼ばれる、古き王宮の文化遺産が建ち並んでいる。よく見ると日本とは違う。ここは外国なのである。ソウルの市内には大河「漢江」（ハンガン）が流れていて、川幅も２～３キロメートルはあろうか、日本では見たことのないような大河が首都の中心を流れている。ソウル市中心部から北に目を向けると北漢山（プッカンサン）と呼ばれる岩肌の山が目につく。ソウル市はこのような特徴を持った地形の上に成り立っている。建物は石やレンガを積み上げたものも多い。気候は東京と比較すると、年平均気温で約４度程低いそうで、厳寒期にはマイナス15度位まで下がることもある。そして空気が乾燥している。私が滞在していた間は寒いと思っていたけれども、今年は暖冬ということであった。ホテルに到着後すぐに私たちは日本大使館へ表敬訪問に向かった。大使館では広報文化院長公使の小川氏と面会し現在の日韓の国際交流について話していただいた。小川氏は日本と韓国の間には不幸な歴史があり、今でも根強く反日感情を持っている人達が韓国にいる中で、今の日本の姿を韓国の人々に知ってもらうということの大変さを話されていた。日本と韓国はとても近いのに、いまだに簡単には埋まらない溝があるのかと思った。

さて、ホームステイであるが、私を招待してくれたホストファミリーは５名の家族構成で、お母さんの、申洛氏（シン・ミョンさん）が過去日本に招へい事業のメンバーとして来られたことから、お世話になることとなった。お父さんの柳文植氏はMBCという民放テレビ局の技術局長ということで、裕福な家庭であると思う。子供は男子２人で、兄柳炯碩氏は20才の大学生、弟柳炯圭氏は18才で今春より大田の大学へ進学する。韓国ではこの家庭のように結婚をしても女性は名字を変えないし、同姓の同じ出身の男女は結婚が出来ないという。その夜は「ユンノリ」という韓国の人達が好んで遊ぶという、すごろくの様なゲームをし早く寝た。

翌日は日程中唯一のフリータイムで、長男の柳さんが一日中ソウルの街を案内してくれた。まず地下鉄で「新村」（シンチョン）という街へ行った。ソウルの地下鉄は現在４路線あり、なかなか移動するのに便利な手段である。しかし１千万人の人口をかかえるソウル市には、４路線は少ないようでラッシュアワー時も大変な混雑である。面白いのは車内で新聞を何度も売りにくることで、日本では見ることのない出来事だった。新村に到着し柳さんはまず大学の卒業式に連れていってくれた。ここ「新村」は大学が多く、若者の街である。大学内に

は花売りのおばさんや露店が沢山出ており、卒業生と家族達でごったがえしていた。次にお父さんの会社であるMBCテレビ局を見学させていただいた。MBCは韓国の民放では一番人気があるそうで、内部はどのようなものであろうかと思って見学してみたが、日本のテレビ局をみているような印象を受けた。次に歩いてすぐそばの「朝鮮戦争展示場」へ行った。場内には闘いで使用された兵器やその歴史を綴る写真・品々が数多く並んでいた。朝鮮戦争。この戦争では、約300万の人々が死に、今でも古里は北朝鮮にあるとか、兄弟が北朝鮮にいるという人達も沢山いる。そして同じく民族なのに敵である北朝鮮からの南進に対し、多大な防衛費をかけているという厳しい実情があるだと痛感した。そうして一日を終えて夜はおそくまで話をした。子供達とは私が見ていたアニメ・マンガ・歌手の話をしたが、日本のことを彼等はよく知っていた。(日本の情報はかなり流れこんでいるのだなと思った。) お父さんともいろいろなことを話したが、若い世代の人達と話すようにはいかず、日本について彼が思っていることを沢山聞かされ、やはりこの世代の人達は、厳しい目で日本のことを見ているのだなと感じさせられた。その一方で日韓両国の交流・親善は少しずつ進んでいるので、これから先に期待するということも話されていた。私も日本と韓国が本当の意味で理解し合えるのはいつのことになるだろうかと考えさせられた。

そして忙しい日程を消化し、日本へ帰る日がやってきた。たった7日間だけの滞在であったが、日本のことが気にかかる。帰ったらまず和食を食べたいと思ったのが面白い。やはり私はふつうの日本人なのだなと感じた。金浦空港には、前日パーティーに来てくれた青年一人が見送りに来てくれ、彼等の友情を感じつつ、「またここに戻ってこよう。」と思いながら韓国を後にした。

ふだん日本で生活をしていると、我々日本人は韓国について、「韓国は日本よりも数年遅れていて日本を追いかけてきている。」とよく言っているし、また、そういう表現を耳にもしますが、それは一部分では確かに合っていると私も思う。けれども今までに韓国のことを学び、体験し、感じた自分の意見から言うと、必ずしもそういうことだけではなく、それは日本人が日本を基準に考えているだけのことであって、むしろ単純には比較できないことのほうが多いように思う。

韓国は直接直接大陸とつながっていて、人々は辛い時(戦乱時)に耐え、独自の文化を持ち、楽天的な所もあり、強い自己主張を持ち、他にもいろいろな違いがあり、けれども日本人と同じ様な顔つきをしているという、様々な類似点と相違点がある。このことを知ることができただけでも、収穫であったと思う。今後また日本と韓国はいろいろな所で関わって行くであろうし、私個人としても向こうに友人というかけがえのない人達を得ることができたので、これからも良い関係を保ち、共に歩んで行きたいと思う。

## 7. 提　言

日韓関係を語る上では、歴史的事実に根ざす加害者・被害者意識を避けて通れないが、それを必要以上に意識するとオブラートでくるんだような不自然な対話に終始してしまうことにもなる。韓国の青年たちは、彼我の長所・短所を正しく認識してその事実を基によりよく生きようとする姿勢をもっている。そしてそれは彼らの物事を見つめる目の厳しさを表わしているわけでもあり、従って本事業のプログラム策定にあたっては、日韓の相違点と近似点をバランスよく配合することが望まれよう。今回の調査中催された交流会の席上などでも、「日本に比べ韓国が決定的に遅れているような超ハイテク産業を見たい」といった意見や「史跡・仏教文化に代表されるような古代史上の日韓の関連を実地に見たい」といった意見が寄せられている。

また、今後の本招へい事業の向上・発展が欠かせないものとして、先にも延べた現地同窓会組織の整備が挙げられる。これは特に韓国側の自主性に委ねられる部分も大きいが、本事業を単年度毎に切り離して考えるのでなく、教育部の琴局長の弁にもあるとおり、『量より質』を重視していく上で不可欠なものと考える。

# Ⅲ 参　考　資　料

1991年10月
国際協力事業団
青年招へい業務室

# 青年招へい事業アフターケアー調査チーム派遣要領

## 1. 目的

青年招へい事業で我が国での交流に参加した日本青年等をASEAN諸国等に派遣し，ASEAN青年の本邦招へいをもって開始された本事業を双方向の交流に発展させ，専門分野別に本事業参加経験者（以下帰国青年という）の日本理解及び研修成果をさらに深めるとともに，再交流を促進することによって，来日時に形成された友情を発展させ，永続的な友情関係を樹立する。

## 2. 実施事項

青年招へい事業実施に中心的な役割を果たした受け入れ関係者をASEAN諸国及び韓国に派遣することによって，以下の二点につきその促進を図る。

(1) 分野別に日本での研修成果のフォローアップを実施し，帰国青年の日本理解を深める。

(2) 日本側のカウンターパート（主として合宿参加青年及びホームステイ受け入れの家族）の帰国青年訪問を支援し，本事業を相互の青年交流へと発展させることによって，来日時に形成された友情を発展拡大させる。

## 3. チーム編成

(1) ASEAN6ヵ国及び韓国に対し，1ヵ国につき1チーム（但しシンガポールとブルネイは合わせて1チームとする）各5名，合計6チーム30名を派遣する。

(2) 1チームの編成はチームリーダー1名，及び団員4名とする。

(3) 各チームは，次のいずれかに該当する者により構成される。

a 都内分野別プログラム関係者

(a) 実施協力団体の実務担当者

(b) プログラムコーディネーター

b 地方分野別プログラム関係者

(a) 地方協力団体の実務担当者

(b) 地方公共団体の窓口担当者等

(c) ホームステイ受け入れ家族の代表者等

c　共通プログラム関係者

(a)共通プログラム講師等

4. 参加者の要件及び選考方法

参加者は，次の(1)～(3)のいずれか及び(4)を満たす者より実施協力団体が推薦し，国際協力事業団が選考のうえ，決定する。

(1) 帰国青年に対し，各分野のフォローアップを実施する能力を有する者。

(2) 招へい青年受け入れにあたり，プログラムの作成実施に中心的な役割を果たした者。

(3) 今後，日本からASEAN諸国及び韓国を訪問する人々のまとめ役になる者。

(4) 英語または訪問国語での簡単な日常会話ができる程度以上の語学力を有する者。

5. 派遣期間

10日間。

6. 標準日程

別添「標準日程表」のとおり。

7. 活動内容

(1) 帰国青年の分野別の研修成果及び相手国の社会・文化・経済事情等を調査し，受入プログラムの改善に役立てる。

(2) 帰国青年に対し，来日時グループ構成分野別にセミナー等の実施，もしくは指導を行う。

(3) 日本側カウンターパート（合宿参加青年，ホームステイ受入家族等）のASEAN諸国及び韓国への訪問を促進するため，再交流の具体的な実施方法を探ることを含め，必要な側面的支援を行う。

(4) 帰国青年のみならず，現地青年諸団体との交流を図る。

8. 訪問・表敬先等

(1) 先方政府機関

(2) 同窓会及び帰国青年の活動現場

(3) ホームステイ

(4) 先方青年団体

(5) 技術協力現場

(6) 現地事情把握のための適当な場所

9. 派遣時期

各国招へい青年受入終了後とし，原則として11月下旬から12月上旬とするが，相手国側の状況に合わせるものとする。

10. 報告書作成

参加者は帰国後速やかに，報告書を国際協力事業団に提出するものとする。

11. 経費負担

航空賃，報告書作成費，及び海外共済会掛金については，国際協力事業団の負担とする。滞在費，現地国内旅費，その他の費用については参加者の負担とする。

12. その他

アフターケアー調査チーム派遣の実施に係る手順及び参加候補者の推薦については，別添「アフターケアー実施分担表」及び「参加候補者推薦要項」に定めるとおりとする。

標準日程表

| 日 | 午　前 | 午　後 |
|---|---|---|
| 1日目 | 日本発 | 現地着 |
| 2日目 | JICA 訪問　打合せ<br>日本大使館表敬 | 関係現地政府機関訪問<br>同窓会との打合せ |
| 3日目 | 現地側同窓会による現知事情<br>オリエンテーション | 技術協力現場視察 |
| 4日目 | 現地青年団訪問 | 活動現場視察（職場等を含む） |
| 5日目 | ホームステイ | ホームステイ |
| 6日目 | ホームステイ | 現地社会文化経済事情調査 |
| 7日目 | セミナー | セミナー |
| 8日目 | 帰国青年との交流会 | 同窓会役員との意見交換および<br>スケジュール打合せ |
| 9日目 | 現地社会文化経済事情調査 | 現地社会文化経済事情調査 |
| 10日目 | 現地発 | 日本着 |

標準スケジュールに基づき、訪問国と打合せをし具体的日程を決定する。

# アフターケア（日本青年派遣）実施分担表

青年招へい業務室

| | 国際協力事業団 | 団体 | ＪＩＣＡ在外事務所 | 同窓会 |
|---|---|---|---|---|
| 募集 | 基準要項の作成 | 要項作成 | | |
| | | 募集 | | |
| | 共通プログラム、地方自治体支部、より１名を人選 | ４名を選考（共プロ以外より） | | |
| | | ＪＩＣＡへ推薦、選考委員会における検討 | | |
| | 計５名を最終決定 | | | |
| 派遣 | | スケジュール案作成、ＪＩＣＡへ提出 | | |
| | 在外事務所へ連絡、確認 | | 実施日程の調整、確認 | |
| | 調整、決定 | 実施契約書の作成、提出 | 同窓会への協力依頼、調整（通訳、表敬、車両など） | ホームステイなどの調整協力 |
| | 契約締結 | | | |
| | 派遣日程詳細通報 | | 同窓会、関係機関に連絡 | |
| | 経費支払い | プログラムの実施 | | プログラム実施への協力 |
| | | 報告書の作成、提出 | | |

# 1991年青年招へい事業アフターケアー
# 参加候補者推薦要項

1991年10月
国際協力事業団
青年招へい業務室

1. 推薦基準

次の各号に該当するもので「青年招へい事業アフターケアー調査チーム派遣要領」の3の(3)に適任者がある場合推薦すること。

(イ)日本国籍を有するもの

(ロ)おおむね20歳～45歳までのものであること。

(ハ)今後とも青年招へい事業に協力参加できるもの

(ニ)心身ともに健康で長期の集団生活に耐え得るものであること。

2. 提出書類

(イ)推薦書　別紙様式(1)によること

(ロ)本事業への活動歴ならびに国際交流活動歴　別紙様式(2)によること

(ハ)履歴身上書　市販のもの，横書きペン字写真添付

(ニ)勤務先所属長の参加承諾書（推薦団体宛）　別紙様式(3)によること

3. 推薦期限

1991年11月12日（土）

4. 推薦先

国際協力事業団理事　遠藤　英夫

5. 選考

国際協力事業団において書類審査を行い推薦団体へ通知する。

平成　　年　　月　　日

国際協力事業団
理事　遠　藤　英　夫　殿

（団体名）
（役職・氏名）　　印

青年招へい事業アフターケアー参加候補者の推薦について

標記に関し，別紙のとおり，参加候補者を推薦したします。

以上

別添々付：推薦書　　部

様式 1

# 推　薦　書

| | | |
|---|---|---|
| 本人氏名 | | 顔　写　真<br><br>（5 cm × 5 cm） |
| 住　所<br>電話番号 | 〒<br><br>☎　　（　　） | |
| 生年月日 | 年　月　日生（満　歳） | |
| 職業及び<br>所属団体名<br>電話番号 | 〒<br><br>☎　　（　　） | |
| 海外渡航歴 | | |
| 語　学　力 | A（　　）B（　　）C（　　） | |
| 推薦理由 | | |

（注）外国語の能力は会話を主体にする。

A. 会話が堪能である。

B. 話の大要を理解でき，ほぼ自分の意志を伝えられる。

C. 簡単な日常会話が可能である。

（推薦団体名）

平成　　年　　月　　日

様式　2

# 青年招へい事業ならびに国際交流事業活動歴

| 年　月　日 | 期　　間 | 活　動　内　容 |
|---|---|---|
| 年<br>月　日～　月　日 | 年　カ月 | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |

(注)青年招へい事業の場合の活動内容には,

① 中央実施協力団体実務担当者　② コーディネーター

③ 合宿セミナーの日本青年リーダー

④ 地方実施協力団体実務担当者　⑤ 地方公共団体窓口担当者

⑥ ホームステイ代表者

⑦ 共通プログラム講師等

を記入する。

様式　3

# 承　　諾　　書

殿

下記の者が国際協力事業団主催，青年招へい事業アフターケアーに参加することを承諾いたします。

平成　　年　　月　　日

本　人　氏　名

生年月日　昭和　　年　　月　　日生

所属機関団体名

役　　職　　名

承　　諾　　者　氏　名　　印

# 青年招へい事業アフターケアー業務実施契約書

1. 業務の名称 1991年度青年招へい事業○○○国アフターケアー調査
2. 契約期間　　年　月　日から　　年　月　日まで
3. 契約金額　　円（内消費税相当額　　円）

頭書業務の実施について，国際協力事業団契約担当役理事中島公明（以下「甲」という。）と○○法人○○○○○○○○△△長○○○○（以下「乙」という。）とは，次の条項により契約を締結し，信義に従って誠実にこれを履行するものとする。

（総則）

第1条　乙は，附属書Ⅰ「○○○国アフターケアー調査実施計画書」（以下「計画書」という。），附属書Ⅱ「契約金額の内訳書」（以下「内訳書」という。），及び附属書Ⅲ「アフターケアー調査チーム（以下「調査チーム」という。）参加者名簿」に基づき，頭書の契約金額をもって頭書の契約期間内で頭書の業務を実施するものとする。

2　前項の「計画書」に，明記されていない事項があるときは，甲乙協議して定めるものとする。

（服務）

第2条　乙は，調査チームが「計画書」及び国際協力事業団在外事務所の指示に従って業務に専念し，誠実に，その業務を遂行するために必要な措置をとるものとする。

（業務完了報告書）

第3条　乙は，調査チームの業務が完了したときは，遅滞なく甲に対して，業務完了報告書とともに，甲の要求する資料等を提出するものとする。

（契約金額の支払い）

第4条　甲は，本契約締結後，頭書の契約金額を，乙の支払請求書を受理した日から30日以内に乙に対して概算払いをするものとする。

（精算）

第5条　乙は，調査チームが帰国した日から30日以内に，第4条により支払いを受けた契約金について証拠書一式を甲に提出し精算しなければならない。

2　乙は，前項による精算の結果余剰金が生じた場合には甲の指示に基づき，甲の定める期間内に当該余剰金を返納しなければならない。

（災害共済等）

第6条　乙は，調査チーム参加者（以下「参加者」という。）の派遣期間中の疾病，負傷等に関し国際協力事業団海外共済会に加入させるものとする。

（契約内容の変更）

第7条　甲は，やむを得ない事情が生じた場合は，本契約内容を変更することが出来る。この場合において，契約期間又は契約金額あるいは参加者を変更する必要があるときは，甲乙協議して書面によりこれを定めるものとする。

（参加者に対する乙の指導）

第8条　乙は，次に揚げる各号について，参加者に対し充分指導するものとする。

(1)　参加者は業務上知り得た秘密を他に漏らしてはならない。

(2)　参加者は，業務に関して雑誌等に寄稿し，又は出版しもしくは講演などをしようとするときは，あらかじめ甲に連絡をするものとする。

(3)　参加者は，派遣国において，調査チームの立場を利用して政治，布教，私利に関する一切の活動をしてはならない。

（契約外の事項）

第9条　この契約に定めのない事項又はこの契約の条項について疑義が生じた場合は，必要に応じて，甲乙協議してこれを定めるものとする。

この契約の証として本書2通を作成し，甲乙記名押印のうえ，各自1通を保有する。

年　　月　　日

甲　東京都新宿区西新宿2丁目1番地
国際協力事業団
契約担当役
理事　中　島　公　明　㊞

乙　　㊞

附属書　I

# ○○○国アフターケアー調査実施計画書

## 1.　目的

青年招へい事業実施に中心的な役割を果たした受入関係者から構成される青年招へい事業アフターケアー調査チームを各国に派遣することによって，帰国青年の日本理解と研修につきフォローアップするとともに，受入関係者が各国の実態を把握し，より効果的なプログラム策定に資することと併せ，片側通行であった交流事業を相互形式に発展・拡充させることによって，一層の信頼と友情を高める。

## 2.　活動内容

(1)　帰国青年の分野別の研修成果及び相手国の社会・文化・経済事情を調査し，受入プログラムの改善に役立てる。

(2)　帰国青年に対し，来日時グループ構成分野別に，セミナー等の実施，もしくは指導を行う。

(3)　日本側カウンターパート（合宿参加青年，ホストファミリー等）のASEAN諸国及び韓国訪問を促進するため，再交流の具体的な実施方法を探ることを含め，必要な側面的支援を行う。

(4)　帰国青年のみならず現地青年団体との交流を図る。

3. 日 程

| 日順 | 月 日 | 曜 | 行 程 |
|---|---|---|---|
| 1 | | | |
| 2 | | | |
| 3 | | | |
| 4 | | | |
| 5 | | | |
| 6 | | | |
| 7 | | | |
| 8 | | | |
| 9 | | | |
| 10 | | | |

附属書 II

# 契約金額内訳

単位：円

| 費　目 | 金　額 | 積　算 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 航　空　賃 | | @　　× 人 | 東京―○○○往復 |
| 海外共済金掛金 | | @　　× 人 | 国際協力事業団海外共済会の本人分掛金として事業団の預り金とする。 |
| 報告書作成費 | | (内消費税　5,344) | |
| (1)　原稿料 | 132,000 | @　2,200×60枚 | 400字詰原稿用紙 |
| (2)　作成諸費 | 51,500 | | 資料購入，複写代，写真等，会議費用等 |
| 合　計 | | | |

附属書　Ⅲ

# アフターケアーチーム参加者名簿

| | 氏　　名 | 生年月日 | 性別 | （上段）現住所（下段）所属先 |
|---|---|---|---|---|
| チーム・リーダー | | | | |
| メンバー | | | | |
| メンバー | | | | |
| メンバー | | | | |
| メンバー | | | | |

１９９１年１０月
青年招へい業務室

# アフターケアー実施に係る留意事項

## 1. 実施要領及び日程

(1) メンバーの推薦

・各参加者の推薦書が全て提出された後，選考委員会における検討を経て決定。

・参加メンバーの所属先に対する参加依頼文書が必要な場合は，原則として各団体より送付する。

(2) ブリーフィング

各実施団体は出発前に参加者に対して，調査チームの派遣目的，スケジュール，訪問先，及び派遣国に概要等，必要な事項を説明する。

(3) スケジュール

・スケジュールの具体的な詳細については，現地同窓会及び事務所との打ち合わせの上で，最終的に決定する。

・セミナーの議題については，現地同窓会の意向を考慮した上で決定する。

## 2. 経費・契約

(1) 契約内容は，別添「契約書」の通り。

海外共済会による補償内容は，別紙参照。

(2) 契約に含まれる経費

・契約書付属書「契約金額の内訳書」に記載されている経費以外は参加者の負担とする（参加者の本邦での旅費，すべての宿泊費，食費，派遣国での地方移動費等)。

・航空賃は，東京国際空港と派遣国首都圏国際空港間のエコノミークラスの往復運賃とする。

(3) 契約手続

・参加者推薦書一式，日程原案提出→調整

・経費見積書，参加者名簿，契約書（案)，念書を提出

・決裁後，契約締結，請求書提出→支払い

(4) 精　算

・精算時の「証拠書一式」には，使用済み航空券残券を含む。

・報告書作成諸費を派遣国現地で支出した場合は，外貨交換証明書を添付の上，精算

する。

・報告書は，チームリーダーの責任において取り纏めて1部を作成し，精算時に提出する。(フォームを後日お知らせしますので，各執筆項目の厳守に留意して下さい)

3. 便宜供与

(1) 現地でのJICA事務所による便宜供与は，現物で支給される。

(2) 上記便宜供与は，次のとおりとする。

空港送迎，車両借上，宿舎手配，通訳傭上，表敬・訪問先のアポイント，交歓会の開催，セミナーの手配，ホームステイの手配。

(3) 事務所負担の車両借上については派遣国首都圏のみとし，7日×2台を限度とする。

(4) 事務所負担の通訳傭上については，7日×1人を限度とする。

(5) 交歓会は，JICA事務所経費で45名程度を1回とする。

(6) 各実施団体は，必要な便宜供与について各項目別に事前に招へい室に連絡する。

以上

1991年10月
青年招へい業務室

# アフターケアー調査チーム報告書作成要領

1. 報告書は下記項目を厳守の上、全体で400字詰原稿用紙60枚程度となるように各チームの責任において取り纏め、帰国後一か月以内に提出してください。
2. 報告書には、調査活動に関する写真を2枚以上添付して下さい。

記

1. 調査チーム派遣概要
   1－1 調査チームの構成
   1－2 調査日程
   1－3 主要面談者
2. 調査の要約
3. 現地活動報告
   3－1 表敬・訪問先における意見交換内容
   3－2 帰国青年同窓会等の活動状況
   3－3 セミナー・交流会実施状況
   3－4 ホームステイ実施状況
   3－5 その他
4. 訪問国における青少年団体の活動状況
5. 青年招へい事業に対する相手国側の評価（関係機関・帰国青年等）
6. 調査チーム参加者の感想
7. 提言

以上

選考委員　各位

平成４年１月７日
青年招へい業務室

# 平成３年度アフターケアー
# 調査チーム選考委員会

上記委員会を次のとおり開催致しますので、ご出席いただきますようお願いいたします。

1. 日時　　1月8日（水）　14：30～15：00

2. 場所　　国際協力事業団　第10会議室
　　（新宿三井ビル46階北側）

3. 内容　　平成３年度アフターケアー調査チーム参加者の検討、承認

4. 出席者

| | | |
|---|---|---|
| 世界青少年交流協会 | 事務局長 | 居崎　司 |
| ユースワーカー能力開発協会 | 理事長 | 堀添　勝身 |
| 青年招へい業務室 | 室長 | 伊藤　勲 |

以上

JICA